

ツォーネ 1 9 8 4

夏眠パラドクサ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

冥土からよみがえったベアトリックスさんがアネットさんと、異形の怪物が跋扈するトワイライト萌えゾーンでイクサする、うたかたの物語

「おい、メガネ！ お姉さんと契約して魔法少女になってよ！ ——  
ん？ ベアトリックスさんじゅうよん歳……あっ無理！」

「そうです。あのコがもれの畏敬する金髪巨乳様なのです」

「こいよアネット！ ミグなんか捨ててかかってこい！」

## 目次

【ハーメルン定義による】序章【正しい神様転生☆】	1
【ぼくらの子が】アインザッツコマンドー 1【いましたよ】	7
【登場二〇〇字で】アインザッツコマンドー 2【やられると】	12
【ドイチユの】アインザッツコマンドー 3【発明品じゃ】	17
【夢見る】アインザッツコマンドー 4【アンデイさん】	21
【義妹】アインザッツコマンドー 5【少佐】	24
【神様がすてきな】アインザッツコマンドー 6【特典をくれるよ】	30
【ラツキー☆】アインザッツコマンドー 7【チャーネル】	33
【どいつさんのぷれいすは】超時空魔法少女グレーテル 0【とっても ゆっくりできるね!】	36
【魔女が】超時空魔法少女グレーテル 1【いる世界】	42
【RMR】超時空魔法少女グレーテル 2【光の書】	48
【カーネル】へ宇宙旅行協会◇ 1【キンタ】	52
【急募! 日給五〇〇USD! 食事、宿泊所つき】へ宇宙旅行協会◇ 2【ミドリIIヒシオズ製薬・西ベルリン基地事務所】	56
【ニューワールド】へ宇宙旅行協会◇ 3【オーダー】	62
【横浜から】へ宇宙旅行協会◇ 4【来た女】	67
【突撃! 〳(p)〵へ宇宙旅行協会◇ 5【隣の秘密基地】	73
【私とベアトと】夢のベアリン王国 1【ワンルーム】	79
【アイウィウプテークチュ、ナッテンキュヘーチュ、ノストスハス	

キヤーリテーベバイ】夢のベアリン王国 2 【アーヤママンテン、ソ  
ラリバユロキユ、アーヤマンテン、ザツドリーラメイードオー】

84

【揺るぎなきユニバーサルジャステイス】夢のベアリン王国 3 【行く  
ぜ!! シュトライブー!!】

【人類の】超常領域からの物体X 1 【支配者】

【深淵に潜む】夢のベアリン王国 4 【そは敵なるや】

103

97

90

【ハーメルン定義による】序章【正しい神様転生☆】

梅田の地下迷宮を出ると、世界は終了していた。

ただちに影響はない時期はすぎたとか、経済が喰い荒らされるとか、社会が救いがたいアホのジレンマによって相互監視状態で袋小路だとか、ゾンビが出て殺すとかってレベルじゃねえぞ。

道端から空のかなたまで、全盛期のベク○ンスキーばりの終了つぶりだった。

我輩は、とりあえず懐中より文明の利器を出して、記念撮影した。

いえーい、みんな見てるうー？

……撮影はできたが圏外だ。きさらぎ駅にも中継局はあるというのに。

そもそも、ここは梅田なのだろうか？ 地下鉄に乗ったら未知なるかたすを越えてしまったとでもいうのだろうか？

時計は九九時九九分を表示していた。ハハハ、時がカンストと申すか、こやつめ。

振り返ったときには暗黒の洞になってしまっていた地下へ戻ることは危険と判断した我輩は、決然たる意志力を発揮して、スーぷおじさん状態の道路へ踏み出した。

ほら、あれだよ。懐中電灯とか持ってないしね。

暗いと危ないだろ？

決してびびったわけではない。

道路の消失点あたりで滲む灯し火を目指して、圧倒的死臭の中を歩くしかなさそうだった。ビル群はでかい棺桶と化している。たたずむ人影はあるが、あからさまにベクつていた。

遠く、狂おしい太鼓の轟きが聞こえる。

腐乱死体色の空で、ドドメ色の陰鬱なお日様が笑ってる。

ヌンヌヌヌツヌンツ♪

キョオ~~~~はええ天気~~~~( ^ o ^ ) /

「よう来やーたわ。まあ坐りやー」

重々しい金属の扉を我輩が開けると、そうメイドは言った。

灯し火は、メイド喫茶だった。メイドの背後には、壁一面に酒瓶が並んでいた。

扉の飾りにされている「考える人」が、強制頭突きで釣鐘を鳴らした。

「えーと、バー……テキーラ」

我輩はカウンター席に坐りながら言った。

メイドはカウンターにグラスを二つ置き、氷を入れ、気前良くテキーラをそそいだ。

「これはサービスだもんで、まずは飲んでおちついてほしい」

「おおきに」

我輩はテキーラを飲んだ。

「汝は死んだでよ。転生だがね」

「ブーツゴホゴホッ！」

「行先は柴犬」

「そ、それはゴホッゴホッけもフレ的な」

「オーウエルのな、一九八三年の」

「ゴホッゴホッ、ゴホオッ！」

「うん、まただわ。ハンメルン定番の」

「シバケンナンデ!？」

「ブツダの顔もって言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない」

テキーラを嘔きながらの抗議をもともせず、メイドは悠然と言葉をつづけた。

「でも、転生と聞いたとき、汝は、きつと言葉では言いあわせない』ときめき』みたいなものを感じてくれたと思う」

「そんな神様転生みたいにゴホッ！」

「どうも、神ですww」

「そんな予測変換できた神様転生みたいに！」

「殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないでほしい。そう思っ、この冥土ハウスを作ったんだわ」

「自分もテキーラを飲みながら、メイドは台詞を言いきった。手渡されたおしぼりで口元をぬぐい、我輩は茶道の呼吸法をもって平均的精神を回復させた。」

「いかにも、我輩は三次元には、つくづく絶望している。二次元へ帰れるならば望むところだ。」

「ドーモ、神さん。初めまして、えー、折主 太郎です」

「じゃあ、注文を聞こうか」

「それは、転生特典みたいなの？」

「ときめき転生特典みたやーな」

「特典ヤッター！」

「必要らしいんで」

「そら折主には必要なもんでっせ。だから神様、ボクにしか見えないちいさな恋人をください。」

「ボクにしか見えないちいさな恋人、と」

「やったぜ、御免な〇い。それから神様、転生先はあの花にしてください」

「二〇一一年……二〇〇一年の秩父、と」

「二〇一一年」

「二〇一一年だと、ちよつと溺死するから」

「なんでそんな崖から落ちて死ぬ確定みたいな」

「いっそのこと、まだBETAが少ない一九八一年にしときやあ」

「あの花にBETAがおかしいでっしやる」

「公式でそんな感じのコラボがあったがね」

「あー……あったあった。ちやうねん、そうやない」

「転生先は変更不能だで、受諾してちよ」

「冥土ハウスの店内放送がブリティッシュ・グレナデイアーズになっていることに、我輩は気づいた。」

フルートの音色は、悪夢めいてひずんでいた。スピーカーが安物に違いない。

「せ、せめてガルパンに」

「希望兵器は戦車、と」

「なんたる無慈悲な強引さか！」

「神は強引。……パンツアーデイヴィズイオンにアルフレート・シユトラハヴィッツがおるで、このあたりにしよみやあ」

「パンツアーデブズボンとかクラウゼヴィッツとか、もう秩父へ送る気もない件について」

「秩父には牛車デイヴィズイオンしかにやーでかん」

「翔んで埼玉の秩父かちゅうね。ないわー。冷戦時代のオモチャみたいな戦車とか戦闘機でBETAと戦えとか、ありえへん。スパロボの一個艦隊くらいないと。ミストさんしか知らへんけど」

「スパロボは却下」

「生産拠点つきのスパロボでもないと、ゆきゆきて赤軍にしかならしまへんで」

「予算枠もあるし」

「よ、予算？ 神に予算？」

「まあ」

「なんぼ？」

「四〇〇神点。いわゆるゴッドポイント」

「ゴッドポイント……あの、ちょっと難解すぎるんですが」

「これが単位換算できる最も近い概念と思われ」

「たとえばゴッドレクイエムを撃つにはおいくらポイント？」

「信徒の力なしで撃つだけなら一ポイント」

「エクスプロージョンを撃つ能力なら？」

「一回一回が限度の放射線をとまなわない〇・〇〇二五キロトンの核火力として、一〇〇〇ポイント」

「さすが真の主役」

「超自然能力で直接攻撃は高くつくから」

「……アメリカ合衆国の大統領になるには？」

「なるだけなら四〇。英語の会得には更に四ポイント」

「なんかそんなゲームがあったような……英語はカタコトのアメリカ大統領が爆誕する事態もありうる、と。因果を無視して能力を得られるなら、逆に考えて、BETAをサクサク倒せる兵器を無限に製造、い



や創造できる能力があればええね」

「三七二ポイント」

あるんかい。しかも予算内。

「どんな兵器を？」

「量子的平行世界に存在する核砲弾でも物質分解機でも」

我輩は身震いをこらえて、テキーラを飲み干した。

「……いかれた国粋全体主義者から身を守るための、なんちゅうか語弊のある言いかたになりまっけど、人間を洗脳支配できるような能力は？」

「支配能力単体に二〇ポイント。五〇億人を支配するなら更に二六一ポイント」

「ゴッドパワーごっついわあ」

「ただし、相手は自我のない精神的ゾンビと化す」

「ぜーんぜんオケ」

暗い窓の外から、狂おしい太鼓の轟きが聞こえる。ジユブジユブと鼓膜を鳴らすそれは、近づいていた。

「支配人数を増やすことは、転生後でも？」

「できる。感染するですよ」

我輩は震える声で選択を伝えた。

「BETAをサクサク倒せる兵器を無限に創造できる能力と、人間を洗脳支配できる能力をください」

「よろしい。あと一七ポイント」

我輩にしか見えないちいさな恋人はマイナス九ゴッドポイントらしい。

なにか恐ろしい罫が潜んでいる気がして、とっさに我輩は言った。

「ほな、我輩も残りポイント目いっぱい美少女にしてください！」

「よろしい」

「フェルマータ！」

フルートの劈くような輝きが転生のときを告げた。

太鼓の轟きが冥土ハウスの壁を砕き、宇宙に穴を穿った。

冥土神はキャベツ検定するハツカドルめいて冒流的な角度で

ポーズを決め、我輩の前途を祝福した。2号、掩護を。許されざるよ。  
「往つてりや」

【ぼくらの子が】アインザッツコマンドー 1【いまし  
たよ】

「おーい！ ちょっと、待ってくれ！」

ラヴゾンは走りだしながら、暖機しているラストクラフトヴァーゲンに叫んだ。

「乗せてくれ！ おーい！」

ヴァーゲンのわきに立つ人物は外套の裾をひるがえして腰の拳銃を抜き、廃墟の闇からよろめき出たラヴゾンに向けた。拡張師団の力カシとは思えない、あざやかな動きだった。

外套の下に人民軍の新式制服をはつきりと認めたラヴゾンは、上着の奥から自分の身分証を出して振った。

窓の灯も消え果てて街路は暗く、その人物が脛丈の外套を着ているせいもあって、荷台の明るさが順光になる位置へ獣のように忍び寄るまで、ラヴゾンには制服が見えなかったのだ。

「乗せてくれ、人民軍だ！」

ラヴゾンは立ち止まって身分証を掲げ、咳きこみながら言った。

恐ろしい裏切りが横行する状態になる廃滅段階の国家において、誰だかよくわからない相手に身分証を出すことは危険な博打だった。下手をすれば地獄行きの切符を見せていることになる。

噂によると、エアフルトの新政権は数ヶ月前に、統一党体制に組んでいた『全ドイツ民族の敵ども』を皆殺しにすると決めたらしい。

旧政権が打倒された晩冬の戦いでラヴゾンは目立つ仕事をシユタージに強いられ、協力者であることが露見した。彼は今では狩りたてられる側の人間だった。

この放棄された街には食料も燃料もなくラヴゾンは飢えて凍えていたが、見かけた輸送車が大砲でも運んでいれば近づかなかつただろう。司令部を新政権によって挿げ替えられた主力部隊には、人間狩りの指令が伝わっていることは確実だからだ。

古いカマーツらしきヴァーゲンはボロボロで、あきらかに主力部隊のものではない。荷台にかけられた幌には、この地域に常駐していた拡張師団の略号が書かれていた。シベリアへ逃げ去ったソビエトに代わって、一九七〇年代末に急造された二〇個師団の一つだ。

物資をあさりに来ている新政権に見捨てられた敗残部隊なら話を聞くだろうし、こんなところを一輛だけでうろついている歩兵隊となればラヴゾンと同じ、逃亡者の類かもしれない。

自動車と遭遇するなど二週間ぶり、これを逃せば車に乗る機会はないだろうという予感もあつた。これは、そう分の悪い賭けではないはずだった。

「置いて行かれるかと思つたよ」

拳銃をおろした相手に、ラヴゾンはホツとしてへつらつた笑いを浮かべた。

青褪めた唇で微笑を返して、黒い外套の女が言った。

「とんでもない。……待つてたんだから」

全身の毛が逆立ち、考えるより早く、ラヴゾンは女に殴りかかつていた。不吉な言葉が引金となつてラヴゾンの本能を爆発させ、弾丸のように彼の拳を打ち出したのだ。

空手の中段突きを女の柔らかい胸にめりこませながら、早まったかもしれない、という思いがラヴゾンの頭をよぎつた。

女の言葉は、他意のない社交辞令だつたのだろうか？ 待ち伏せていた追手ならば、三人がかりで獲物に銃を突きつけるまで、わざわざこんな台詞は吐かないのではないだろうか？

そうだったとしても、もう遅い。攻撃してしまつたからには殺すしかなかった。

痛みに怯んだ相手の腕を極め、拳銃を奪う。

地面に倒して喉を押さえ、叫べないようにしてから頭が割れるまで銃把で殴る。

仲間が何人いるかわからないが、車内にいる者は殺してヴァーゲンを奪つて逃げる。

女を静かに殺し、不意打ちで車内を銃撃できれば、やってやれなく

はない。彼だつて元・精鋭部隊に潜入していた工作員だ。女一人に手こずる不安はなかった。

女の左手が鞭のごとき速さで動き、ラヴゾンの右手首を捉えた。ラヴゾンの正拳に、女はまったく怯まなかった。

ラヴゾンは左手で拳銃をもぎとろうとしたが、女は微笑をそのままに右腕をあげて発砲した。発砲炎を顔に浴びて、ラヴゾンは顔をそむけ仰け反ってしまった。

組みつき状態から離れるために強く腕を引く。奇襲は失敗だった。逃げねばならない。

しかしラヴゾンは、女を振り払うことができなかった。逆に右手首を骨が碎けるような力で握り締められ、激痛とともに転倒させられていた。

「ち、違う、誤解だ。誤解なんだ」

氷になりかけた雪を口から吐き出してラヴゾンは言った。

「襲うつもりじゃなかった。あんたがまぎらわしいことを言うから、つい、癖で体が、勝手に動いたんだ。殺そうとしたわけじゃない」

「まぎらわしかったかしら？ それは失礼」

女は殴られたことを気にとめていない、ラヴゾンを慄然とさせる悪魔のように蠱惑的な声で応じた。

「自己紹介しないとね。初めまして、ラヴゾンさん。アインザッツコマンドーです」

雪より冷たいものを腹の奥に感じて、ラヴゾンは震えた。

アインザッツコマンドー。

その名は、革命の短い熱狂が冷め始めた初秋頃から、難民や逃亡者がささやくようになった。まともな人間ならば口にもすることも憚る名をあえてつけられた、公式には存在すらしていない殺戮組織だ。

それはエアフルトの革命臨時政府が、西側から注文された四五〇万の間引きを実行させるために、旧政権派とみなした軍と警察の諸部隊を再編制したものだという。しばらくのあいだ逃避行をともにした統一党員の科学者は、そう教えてくれた。

懲罰部隊的なこの集団がさせられている間引きの対象は、もちろん

歩兵より圧倒的に強い宇宙怪獣の大群などではなく、難民となる予定の人間だ。ソビエトと違って正気な西ドイツやアメリカの政府はできもしないことを、戦争でいそがしい前線国家に要求したりはしない。

ボンから来た英語を喋る『DDR問題担当委員』は「国家的総退却の過程で、四五〇万人の難民を最終解決することは東ドイツならば可能である」と言っていたらしい。四〇年前に二正面戦争の片手間でおこなえていたのだから、同じ仕事を今回は少し急ぎでやっつけてくれというわけらしかった。

臨時政府では下っ端あつかいだったものの、専門家として西側との交渉にかかわった統一党員の科学者は、七月にいくつかの都市で精肉工場が改造され『加工所』と呼ばれるようになったことを知っていた。

難民統制居留区から移送されたスロバキア人、ポーランド人、ウクライナ人などが入っていったきり出てこない『加工所』から加工肉が出荷され始めると、最終解決されなくなかった彼女はエアフルトを逃げ出した。

革命政権は親ソビエト的、親ユダヤ的なドイツ人も残らず殺すとボンの高官たちに約束していたからだそうだ。

以後の中央情勢を彼女は知らなかったが、保安省や国防省の腐敗した残骸から、もつと卑猥で醜悪な寄生虫じみたおぞましい組織があらわれたことは間違いない。

ラヴゾンも一度ならず、加工肉を口にしていて。職に就けない逃亡者でも手に入れられる、正体不明の安価な獣肉が出回った時期は、アインザッツコマンドーや『加工所』の出現と一致していた。

淡白な豚肉に似た加工肉の味がよみがえり、口に残る雪を喉に詰まらせてラヴゾンは嘔吐した。

雪をにじませる反吐に、かわいそうな痩せっぽちの女学者の顔がかさなった。彼女はどうしても加工肉を食べることができず、ソビエトの核爆弾がもたらしているとされる異常に早く厳しい冬に耐えられなかった。

ラヴゾンの胃液に混ざり形を崩した肉片とちょうど同じ大きさの

胎児とともに、彼女は凍えて死んだのだ。

【登場二〇〇字で】アインザッツコマンドー 2【やられると】

「フォン・ユンツトが持ちこんだものを回収に来た。返してもらいましようか」

慣れた拷問屋の平静さでラヴゾンの回復を待っていた女が言った。

「も……持ちこんだもの？」

「そうよ。あれは政府の管理物で、嚴重な隔離を必要とする。放棄地区で何人かつないでみようか、なんて粗雑なあつかいをされては困るわ」

「彼女の遺品は、服しかない。金目のものはみんな食料に換えた」

「遺品？ フォン・ユンツトはどこ？」

「死んだよ。……一カ月前だ」

「死んだ」

なにごとか思案するようすで、女はしばらくラヴゾンを見つめた。血の気がない肌と唇と、それとは対照的にあざやかな赤い瞳が魔物じみていた。

「理由は？」

「それは、風邪をこじらせたんだろう。寒いし、食料もなかった」

「実験に失敗したり、怪物に襲われたりはしていないのね？」

「いや、実験なんか、する余裕はなかった。BETAは見ていない」「そう」

ヴィルヘルミーネ・フォン・ユンツトが政府の機密を持って逃げたらしいことを察し、ラヴゾンはゆっくりと立ちあがった。

ヴァーゲン内に人間狩りの仲間はいなかったらしいが、近くの路地にはいて、銃声を聞きつけたおそれがある。ラヴゾンは一歩、後ろにさがった。

女はラヴゾンへの関心を、急に失ったように見えた。当てるつもりがなかった一発を撃ったとき大きな音を立てようともしない。いさ



さか奇妙だが逃げるには好都合だった。

「おれはなにも聞いていないし、預かっていない。それらしいものを見てもいない。彼女と初めて会ったのは八月になってからだ。それより前に誰かに渡したか、郵送でもしたんじゃないのか」

「ええ……フォン・ユンツトは七月に、各所へ貴重品を発送している。エアフルトから脱出するさいに囷としてね」

「囷は無駄で、あんたはここを探り当てたってわけか？ 誰に吐かせたか知らんが、いや、まったく大したもんだ」

喋りながらラヴゾンは少しづつ後退した。

「彼女は確かに、ここへ来ていたんだからな。だが、こんな状況じゃ、仕事が遅かったぜ。あの娘は死んだし、おれになにも伝えなかった。無関係なことに巻きこむのを避けてくれたんだろうよ」

「……」

「お探しの『物』は、とつくにBNND(西ドイツ・連邦情報局)に渡ってるんじゃないか。それともCIAかな」

突っ立ってラヴゾンを見ていた女がCIAの一語に反応して、なにごとかつぶやいた。

呪詛じみた声の合間に「あれを西で」……「アメリカの支配」……「宇宙旅行協会」……「ここも囷とは」と聞きとれる言葉が混ざった。

ラヴゾンは頭を振って笑った。

「おいおい、あんたも疑り深いね。ここにいたのは、ただの偶然だ。こんなところに、わざと留まる？ はっ。来るかどうかからん追っ手を待って、自分を囷にそんなことをするやつがいるもんか」

「いえ、囷にされていたのはあなたよ、ラヴゾンさん。我々は六六六の隊員だった人間を追跡することができる。フォン・ユンツトにも」

不気味な言葉でラヴゾンを立ちすくませ、女は深々と溜息をついた。死人の肉を凍らせる寒さの中で、女の息は体温を示さなかった。

右手にぬくもりを感じて、ラヴゾンは自分の出血に気づいた。山岳用の厚い手袋が外れかけ、甲の皮膚までザックリと切られている。

「確認するわ。これがヴィルヘルミーネ・フォン・ユンツト。いい面構えでしょう」女は上着のタッシェから出した写真をラヴゾンに向け

た。「この女が、あなたとここで……『一緒にいた人物』で間違いないかしら？」

写真には、工事中の空水槽を背景に、白衣の女が写っている。

整った顔立ちだが表情は険しく、目つきは最前線の兵士と似て気違いじみていた。

撮影の偶然で、固定された顔がそう写っているわけではない。ただの紙に複製されたにすぎない一／五ほどの大きさの顔には、内部に重々しく堆積した狂気も、縮小されてはいるが機械の正確さで複製されていた。

ヴィルヘルミーネは、優しい娘だった。彼女は、あの顔で頬笑みかけたり、みじめに食料をあさるしかできない不甲斐ない自分を慰めてくれていたりしたのだっだろうか、とラヴゾンは考え、名状しがたい非現実感に襲われた。

「そうだ。この娘がヴィルヘルミーネ・フォン・ユンツトだ。最後まで、ずっと一緒にいると誓った、おれの」

異常な感情に強いられて、ラヴゾンはそう言った。

無事に動く左手で、彼は写真をつかんだ。人のものではない爪で切り裂くことを避けてか、女は指に挟んだ写真をラヴゾンがとるにまかせた。

アインザッツコマンドーと称する黒衣の女から逃げるつもりだった彼の意思に反して、脚は相手に殴りかかった位置にまで戻っていた。

「お……教えてくれ。——こ、こいつは……こいつは、いったい誰だ？」

震える手でつかみとった写真をクシャクシャにしたラヴゾンを冷然と眺めて、女は答えた。

「それが、本物のフォン・ユンツトよ。あなたも一度は直接に会っているはず。頭をいじられたときにね」

「おれは洗脳なんか、されてない。発信機も埋めこまれちゃいない。でたらめだ。なぜそんな嘘をつく？」

忌まわしい写真を投げ捨て、視界の隅にヴィルヘルミーネの肉片が

映り、ふたたびこみあげた吐気でラヴゾンは雪に膝を突いた。

故障したトラバントを道端に止めて途方に暮れていたヴィルヘルミーネの、近づいて話しかけたラヴゾンに向けた礼儀正しく困惑した微笑と、「TSFの整備を？」という少し驚いた声を憶えている。

嗤笑に歪むヴィルヘルミーネの唇は、瑞々しい桜色だった。「モーターの故障なら調べてみましょうか？」と声をかけたラヴゾンに、ヴィルヘルミーネは笑顔で応じたのだ。

「ここにいたか。六六六の生き残りだな」

革命英雄として共和国に知らぬ者がなくなつた六六六中隊の身分証をラヴゾンが見せると、ヴィルヘルミーネは頼もしげに手助けを願った。

あのとときのラヴゾンは重い自動車の工具など持っていないが、故障は修理できて、二人はトラバントをバルト海岸へ走らせることができたのだ。

「恥知らずな、屑の嘘つきめ……。こんなところまで来て、おまえら無能は嘘しか言わない」憤怒に駆られて、ラヴゾンは呪いの言葉を吐いた。「おまえら小役人は、権力の奴隷だ。ケツに火がついても、頭からつぽのアホ面で尻尾を振っているしか能がない。クソっ垂れな飼い主どもがアフリカやアメリカの別荘へ連れて行ってくれるとでも思っているのか？ 死ね！ おまえらも、おれたちとなんら変わりなく、このクソ溜めで野垂れ死ぬんだ。死ね！ 屑が！」

「あなたの誤解を解くために説明すると、わたしはもう権力に仕えていない」

悪罵になんの不快も示さず、女は言った。

「わたしは今では、もつと偉大な、もつと深淵の、もつと恵み深い存在に仕えている。過去のあやまちを償い、人類を救済するため……。フォン・ユンツトは忌まわしき我々の罪過の元凶で、人間をあらゆる種の超能力で操る『発明品』を奪って逃げている」

「超能力？」

「ESPと称されている。聞いたことはあるでしょう」

「クレムリン詐欺か……？ なんていきなり、そんな話になるんだ」

「モスカウでおきたと似たようなことが、ベルリンでもおきていた。同じESP発現機の方でね」

一〇年前、大敗北にうろたえたソビエト指導部は国際的詐欺にひっかかった。

実践主義超心理学会なる集団がラスプーチンめいた超能力者を奉ってクレムリンにあらわれ、この危機的状况を救ってやろう、と小便をちびっていたノーメンクラトゥラに告げたのだそうだ。

彼らはルビャンカ監獄で拷問される替わりに国連の秘密会議に赴き、いくつもの支援をとりつけた。これで勝てると思いきやソビエト指導部はミンスクへの大攻勢を企て、西側をまきこんで実行し、ふたたび大敗北して回復不能な損害を被った。

人間に対してはすばらしい効果を発揮した彼らのESP、あるいは超心理学的技巧は、BETAに対してはなんの効果もなかったのだ。

実践主義超心理学会は、その正体や背後にいる傀儡師が誰かはわからぬままどこかへ蒸発し、ソビエトはヴォルガ以西の勢力を完全に失った。

無知な民衆の心にはまだ残っていたソビエトの権威を地に落とすべく、諸国の政府は放送、出版業者を通じて、これらの事情を一九七八年の末頃から暴露している。共和国でも出版、あるいは輸入販売された何十冊もの書籍は、超能力など欺瞞や妄想であり実在しない、と結んでいたものだ。

しかし、異形の爪を生やした魔物じみた女を前に「バカを言うな」とつづけることは、ラヴゾンにはできなかつた。

「それが人間をどのように操るかは、旧政権の迷妄狂態を知る者には説明するまでもないでしょう。わたしの任務は、それらを地獄に返品することよ」

【ドイチユの】アインザッツコマンドー 3 【発明品  
じや】

「それじゃ、おれは超能力で暗示をかけられたり、位置を探られたつて  
のか？」

かすれた声でラヴゾンは尋ねた。怒鳴ったせいにか、胃酸に焼かれ  
た咽喉がひどく不快だった。

「大雑把にはそうね」

女は短く答え、一呼吸の間をあけて官僚的几帳面さで補足した。

「フォン・ユンツトは魔術を用いて、あなたの記憶や認識を捻じ曲げて  
いる。ESP発現機に、そこまで器用なこととはできない。数百キロ  
メートルの範囲で知っている人物を追える程度の、ずいぶんと不完全  
なものだから」

「ESPに、魔術ときたか」ラヴゾンは笑った。「ホロカオストの次は  
魔女狩りかね？ この国も、いよいよ終わりだな」

「そうね……。歴史の闇に潜み、日の当たるところへは決して出てこ  
なかつた者どもが堂々と跳梁する状況にいたれば、そこはもう終わり  
でしょう」

怒りが冷えて、ラヴゾンは自分と喋っている女が狂っていることに  
気づいた。

仲間を待つて時間稼ぎをしているかのようだが、そんなものはいな  
い。たぶん何日か前に死ぬか逃げるかして、一人きりになったこの女  
は現実と妄想の区別がつかなくなったのだろう。

アインザッツコマンドーには麻薬が特別給与されていると聞く。  
隊員の任務は、善良な人間が平然とこなせるようなものではないから  
だ。麻薬で頭が弱った人間が、この世の終わりを体現している放棄地  
区の廃墟を一人でうろつけば、速やかに発狂してもおかしくなかつ  
た。

「なあ、あんた——」

「任務を断念したほうがいい」と提案しようとして、ラヴゾンは言葉を詰まらせた。

男のうめき声が、自分の名を呼んでいる。

それは「アハトウंक、ラヴゾン。アハトウंक」とくりかえしていた。

連禱はヴァーゲンの荷台からだった。徐々に大きく明瞭になる苦しげな声は、ヴァーゲンの荷台から発されている。

荷台の前に立つ女が微笑を消し、地面のヴィルヘルミーネだったはずのものを見やった。

ラヴゾンはヴァーゲンの後部へ走った。はつきりとした警告になった大声は、顔が脹れあがるまで格闘訓練をさせられた新ノイシュプラーヘ言世代のような喋りかたではあるが、それでも聞き分けられる古馴染みのものだった。

左手でクリンゲを抜き、ラヴゾンは幌を開いた。

「フォルシュトリヒー！」

荷台には水槽と、連結された濾過槽と発電機が置かれていた。濾過槽と配線でつながる発電機は、ラヴゾンが専門とするTSFの部品だった。

水槽に上掛けされた粗雑な機械に、熱で溶けかけた蠟人形のようなものが固定されている。その一つが、動く口から蠟を噴きこぼして喋った。

「ラヴゾン、逃げろ。すぐに、もうすぐ。開く。もうすぐ開く。おまえは死ぬ。開く、開くと死ぬ」

発電機に限らず、驚異的に高性能なTSFの中枢部品群は、いまだにアメリカでしか製造できない。前線となる諸国には（共産主義陣営であつても）無償供与されるが、これらはTSFにのみ使つてよい、という乱用を防止する不合理なまでに厳しい条件がアメリカ政府からつく。

もつとも、目の当たりになっている事例が示しているとおり横流しはそこら中でおこなわれており、それもあつてかTSF用の発電機や制御機器はラヴゾンが軍に転職させられてから一〇年間、常に不足して

いる笑えない状況だったのだ。

旧政権時代から、横流し犯はときおり逮捕され西側にも伝わるようなハリヒトで公表されていた。

最大の盗っ人は、政府内の犯罪者を探る側だったシユタージだ。

正体を暴かれた彼らの犯罪は、政府も知らない自分たちだけの秘密部隊を作るというチンケなコソ泥とは格が違う壮大なもので、アメリカとの協定も一応は破っていないといえなくもないものだったが、当然ながら許されることはなかった。

濾過槽には、そのシユタージの、『全ドイツ民族の敵ども』とされた犯罪組織の紋章が、でかでかと剥がされもせずくっついている。

「蓋、蓋に、ラヴゾン、逃げる、すぐに。おまえは蓋に、穴の、された。開けられた穴を、もうすぐ開く、ふさぐ、隠す、蓋に」

目が見ることを拒否していた喋る蠟人形が急きたてた。

ラヴゾンは恐怖に掻き乱され、なにか別のことを考えようとする頭で、それが六六六中隊での同僚だったフォルシュトリヒであることをどうにか認識した。

「おまえのほうが死にそうじゃないか……」

フォルシュトリヒの胸から下は、赤黒い大きな腫瘍じみたものに変わってしまっている。脚はなく、腫瘍にかぶさっている皮膚はなかば融け、膿がしたたっていた。正常な身体を病変部がここまで犯せば、とても生きてはいられないはずだとは素人のラヴゾンにも理解できた。

濾過槽に比べていかにも急ごしらえな人間籠には、他にも数個の生首がうごめいている。

彼らも死んではおらず、無言で、しかし見紛いようもない意思をあらわにして、目と口を狂おしく動かしていた。横隔膜や肺を失っている、声など出せはしない。

そして蕩けた複数の腫瘍と下側でつながる、死んでいるはずの人間の残骸を生かしつつづけている、もっとおぞましい水槽にたゆたうものから、ラヴゾンは耐えられず目をそむけて胃液を吐いた。

「手のこんだことをすると思えば、やはり罠だったか」

女が言った。フォルシユトリヒは無理をしたせいなのか、崩れた顎と舌を垂れさげ痙攣をおこしていた。

「わざわざブリーデヴェル版をイエツケルンに送ったわけがわかった」

ラヴゾン は口を袖でぬぐった。

「これは、なんなんだ」

カマーツを奪うことを考えながら、ラヴゾンは意識せず疑問を漏らした。女の「人をつなげる」という言葉の意味が彼にもわかった気がした。

「それがESP発現機よ。……へグローサー・ブルーダー」と言ったほうが通じるかもね」

「兄だど？ こいつが、この化け物が誰の兄だというんだ」

「かわいらしい幼子たちが、ちゃんとながつているでしょう？ ポリシエビキの祭司が主張するところでは、それは全人類の希望。あまねく人類を導く兄。あまりにも儂く弱々しく、不完全な人類を新たなる階梯へと進化させる救世主なのよ」



【夢見る】アインザッツコマンドー 4 【アンデイさ  
ん】

女にクリンゲを投げつけ、ラヴゾンは運転席へ走った。

撃たれるより早くヴァーゲンに乗りこむ自信があつたわけではない。女の狂った戯言が耐えがたく不快だったのだ。

車体に跳びついて扉を開けようとするラヴゾンを、背後から灼熱の痛みが襲う。

廃墟にこだまする銃声と、自分の悲鳴と、雪が積もった路上に打ちつけられる体の音をラヴゾンは聞いた。

「あなたは、もう逃げられない。お友達の忠告は手遅れよ」

ヴァーゲンの後方をまわりこんだ女の足音が近づく。退屈しのぎに喋っているような口調は、他人の重大事を官僚主義的傲慢さで、どうでもよさげに決めつける卑しい下司どものそれと同じだった。

起きあがろうとして、ラヴゾンは腹からあふれる体液の異常に気づいた。それは赤い血ではなかった。玉虫色に輝き、かすかな虹色に分かたれた光を放つ粘液だった。

「……………これ、は……………なにをしたんだ。おれの体に、なにをした？」

「物質的な、地球の生物と比べればヘグローサー・ブルーダーは不死身に近い存在なの。夏のあいだも、あれは腐らなかつたでしょう。あなたに食べられても死にはしない」

女は説明を考えてか、少し言葉を切った。

「肉の衣をまもつてはいるものの、本質はもつと霊的な存在である、といえはわかりやすいかしら？ フォン・ユンツトはヘグローサー・ブルーダーの古くからの飼い主で、魔術的にあれらを飼い馴らし、使役してきた。ゾビエトの依頼で人間が受け入れられる生理組織を形成させたり、その形態から解放して——つまりヘグローサー・ブルーダーをやめさせて、別のものへと変えることもできる」

「ゾビエトは、もう滅びた。核爆弾を使い果たせば、いかれたポリシエ

ビキどもも消えてなくなる」

「ところが、そうはならない。コミーに信仰心をよみがえらせたESP発現機には、確かに神として崇められるだけの力がある。アラスカ租借を知っているでしょう？ アメリカのありえない譲歩は、ESP発現機……いえ、その人間の姿をした子供たちの仕業なのよ」

「妄想だ」

ラヴゾンは身を丸めてうなった。

「ゾビエトの人体実験、おれだつて聞いたことがある。BETAには利かなかつたんだろ。くだらない計画は失敗したんだ。そんな出来損ないの肉塊が、救世主だ？ それは、なんの役にも立たない、腐った標本だ。おまえらは、汚物を偶像にして妄想に耽る、いかれた負け犬だ」

「まあ、そうかもね。ハバロフスクのポリシエビキは見限られたようだし。アメリカで科学主義者と、方舟でも作る気になったのかもしれない」

「狂つてやがる……支離滅裂な戯言だ」

ラヴゾンは力が入らなくなった体を、雪に横たえた。

たまらない寒さが腹の奥から広がっていた。

「なんで……、そんな妄想に、おれをまきこむ」

「六六六中隊に復讐するためでしょう。へ夢見るアンデイはフォン・ユンツトにとつても、それなりに重要な駒だった。三月二八日の、あの革命騒ぎの夜に、六六六を操っていた聖人どもが混乱に乗じてへ夢見るアンデイを焼き滅ぼした。あなたを用いて手間をかけたことをしているのは、その報復をしたいから……おそらくイエツケルンでも誘き寄せて、もうすぐあらわれる怪物のおもちやにするつもりだったんでしょね。まったく、魔術師は残虐で執念深くていやだわ」

「夢……見る……？」

「ああ、へ夢見るアンデイはベルリンに設置されたESP発現機の群体名よ。BNDがつけた渾名だけどね。愚かなモスカウ派がつけた名はへドイチユ民族の真なる指導者。シユミットは、あれでなかなか……白いだけあつて洒落が利いている」

「……」

「……来るか。さようなら、ラヴゾンさん」

なにもかもが雪のように白く霞んだ視界に、ラヴゾンは虹色の爆発を見た。

機械の脚が彼をまたぎ、雪を踏み散らして地響きをたてた。

「なっ——、なに？」

「……ハツハツハツハツハツハツ！ 少佐、バラライカが好き？」

結構！ ではますます気になりますよ！」

【義妹】アインザッツコマンドー 5 【少佐】

「兵器まで？ こんなオプツイオンがあるとは聞いていないわ。説明不足よ」

急に勢いよく喋りだしたフォルシュトリヒの声が近くに聞こえ、ラヴゾンはそちらに顔を向けようとした。

地に這いつくばって聞いていた女の声は、さつきまでとは逆に足のほうから聞こえる。

ひしゃげたカマーツの幌、夜空、バラライカが前方に見えた。

大気汚染で星は見えない空に、狂気をもよおす玉虫色の紅炎を放つ月が輝いている。

カマーツの電球に照らされ、バラライカの外板が煙るように夜の闇へにじむ。肩に描かれた三文字のエムブレムが虹色に揺らめく。魂までも変色させる地獄の熱が、陽炎をまとう機械仕掛けの怪物から噴き出していた。

あの世へ亡者を下水道のごとく流しこむという神話の河に落ち、罪過で汚れた水面のむこうへ遠ざかってしまった生者の世界を見ているかのような光景だった。

バラライカが夜空に動き、その手にかまっていた幌布を破った。カマーツを揺らされ、ラヴゾンは濡れた荷台の床に、あおむけに転がっている自身を認識した。

融け崩れながらも生きている臓器塊が入っていた水槽から、バシヤバシヤと生臭い水がこぼれている。

ラヴゾンは周囲を見まわそうとしたが、回復しつつある視覚に反して、体に力を入れることはまったくできない。心臓だけが狂った速さで脈打っていた。

「ほおーら、この音！ 改善機！ いい音じゃないか、余裕の音だ！ 馬力が違いますよ！」

拷問台から革命的に救出された囚人のような狂喜ぶりでまだ喋るフォルシュトリヒの声は、水槽より近い。導管や添木でつながれている

た籠が水槽から外れ、荷台の床に落ちたのだろう。

おそらくバラライカが着陸噴射で自分を吹き飛ばし、ヴァーゲンの幌に腕でも接触させて、繫留具の限度を超えた力をかけたのだ。

一キロメートル離れていても鳴りわたるTSFの飛行音が聞こえなかったような気がするが、はつきりと思いだせない。異様に鮮明な過去の記憶がわきあがり、つい今しがたの出来事を意識の遠くへ押しやってしまっていた。

楽しいにわめくフォルシュトリヒが「プギエーツ」と悲鳴をあげ、ラヴゾンの眼前を、女に投げつけたクリンゲが腐汁を散らしてクルクルと飛んだ。

「バラライカ、応答されたし。こちらは非常事態全権指導部、特務一三」

拡声器がカマーツのダハから、ひずんだ低品質な音を発した。

短い沈黙を挟んでバラライカが、より高性能なドイツ製の機械を用いて「フツハア、フツハア」と、けだものじみた嘲笑を返した。

「非常事態全権指導部、特務一三よりバラライカ。所属をあきらかにせよ」

「はああ……？ 所属？ 非常事態、全権指導部の、特務一三？」

けだものの笑いが女の声に変わった。嘲りのひびきを残す声は、憤怒が押しこめられてうなるようだった。

「おまい、なに言ってるうう？」

バラライカが腕とリュックヴァッフエンベヘルターを動かして、前腕砲架に携帯突撃砲を接続させた。TSF兵装部を何年も担当していたラヴゾンには、音だけで挙動がわかる。

最大装填時で八トンになる突撃砲を支えての肩下方回旋まで五秒。バラライカでこれをやってのける操縦者は、かなりの凄腕だ。六六六中隊の戦闘要員として長生きしていた連中でも、できるかどうかの早業だった。

「とりあえず説明してね。シュタージの犬チクショーム（註 ドイツ語）が、どうしてこんなところを無用心にうろついている？ 武装警察軍はどうしたの？」

「武装警察軍は解体された」

至近距離で突撃砲を向けられたであろう黒衣の女が、平然と答えた。

「解体？ カカシみたいな役立たずどもが死にすぎて、改編されちゃった？」

「違う。国家保安省そのものが解体されたからよ。反乱軍が勝利した」

「勝った？ バカな——シユタージが解体？」

「内戦は、反乱軍が勝利した。西側諸国は彼らを支持した……知らないかった？ 今は彼らが、新しい政府を独裁している。非常事態全権指導部としてね」

「アメリカが、反乱軍を」

バラライカの操縦者が驚きをあらわにして、言葉を切った。

旧政権が崩壊したことは、八ヶ月前に世界中へ発信されている。無線機があればどこでも聞ける情報をいまだに知らないとは奇妙だった。

まるでTSFではなくツアイトマシーネに乗って、八ヶ月前の世界からやってきたかのような反応だ。

「えーっと、わりに大事なことだよ、それって。一言も説明されてないんですけど……その、全権指導部はアメリカの足をなめてるの？」

「ベルリン派よりは望ましいと評価されているよね。彼らはアフリカ侵攻へ、国策の舵を切った。アフリカでレコンキスタをおこなう代償として、オイローパに残るFRS（連邦準備制度。アメリカ経済を支配する金融機関）財閥を根絶やしにする約束もアメリカにしたらしい」

「ほお、反乱軍は、つくづく知恵遅ればっかりだね……まあいい、アメリカは同志みたいなものだし六六六中隊は家族も同然だし？ わたしが領導してあげるよ。全権指導部は、今どこ？」

「エアフルト」

「なるほど、居場所はあつてるのか。収容所でもできてるのかと思つたお。今度はわたしが強襲しちゃうぞ♡ みたいなの？」

「ここからエアフルトを攻撃するつもりだったの？」

「そうだけど、シユタージはつぶされちゃったんでしょお？ あーもう、いきなり予定が狂っちゃうなく。顕現するところに事情を知ってるやつが誰かいるはずだからって、もうね。説明不足にもほどがあるだろと」

困惑した口調で、バラライカの操縦者が愚痴った。氣勢を削がれた声は意外に若い。

ベーパーゼーで会ったTSF操縦士の姿と声が、ラヴゾンの脳裡に次々と再現された。

補充される戦闘要員の平均余命が驚きの短さだったことでも悪名高かった六六六中隊には、存在した数年間だけで一〇〇人以上のTSF操縦士が在籍していた。人間を使い捨てにする旧体制の打倒まで生き残れたのは、わずかに四人。

バラライカのラオトシユプレヒヤーが発する声と、若い腕利きの金髪の巨乳の六六六中隊員の姿があわさった。名前は思いだせない。異教の神々に加護された六六六中隊には、若い腕利きの金髪の巨乳の操縦士が何人もいたせいだ。

ラヴゾンは彼女の「六六六中隊は家族も同然」という言葉を信じて助けを求めようとしたが、痺れた冷たい体は指一本も動かせなかった。

「新政権——エアフルトの全権指導部は攻撃対象ではないということ？」

黒衣の女が尋ねた。

「フォン・ユンツトから、なんの仕事を請け負っている。六六六の生き残りを消しにきたんじゃないの？」

「なんでそんな推定になってる」

「彼らは知りすぎた。そして〈超心理学会〉を敵にまわしている」

「超心理？ ああ……、ゾビエトの。じゃあフォン・ユンツトってのは〈夢見るアンデイ〉の飼い主かな？」

「ええ、そうよ。〈夢見るアンデイ〉を通じて旧政権を飼育していたツオーネの牧場主が、ヴィルヘルミーネ・フォン・ユンツト。確認で

きた限りでは、この名でアーネンエルベ時代から活動していた痕跡がある。ベルリンに巣喰い、政府を狂気と腐敗の塊にした諸悪の根源というわけ」

「諸悪の……フツフツフ、新しい飼い主に、冷えた餌を喰わされてる負け犬だからって、責任転嫁は良くないよお〜少佐〜。あんたもその狂気に、大喜びで尻尾を振ったくってた一人じゃなかった？」

「わたしはもう、やつらの支配を受けていない」

「だから心置きなく、今の飼い主に尻尾を振ってると。結構な処世術だねえ、尊敬しちゃうよ。それで、シユタージをブチのめした反乱軍は〈夢見るアンディ〉をどうしたの？」

「大部分は破壊された、と聞いている。臓器まで生体組織がゲシユタルト崩壊していた部分は焼却され、人間としての個性を残していたわずかな部分が、切り分けられて保存されたらしい」

「保存されてる場所は？」

「それは知らない」

「はアイ？ ふざくんなよ、あんた六六六の飼い犬さんでしょお」

「六六六は〈夢見るアンディ〉を手に入れてはいない。〈アンディ〉の破壊は、暫定政権との決戦と同時に起こされた。中隊は人間との闘いに手一杯で、そちらに力を割く余裕はなかった。あとで彼らがベルリンを調べて見つけたのは、焼かれた玉座だけだった」

「じゃあ、バラして保存したのは誰？ シユミット？」

「シユミットはあるとき行動不能にしてやったし、違うでしょう。内乱状態のベルリンで、あれだけのことができるとなると六六六の背後にいた〈成聖騎士団〉か、アメリカとつるんでいる〈宇宙旅行協会〉……他は、せいぜいハバロフスクの『新人類』か」

「インチキ聖人どもが持ち逃げ……？ ベルンハルトはなんと云ってるの？」

「ベルンハルトは死んだ」

「死んだ？」

操縦士が笑った。

「今度はどんなむなし希望を語ってるかと思えば。夢をかなえてく



れる救い主が消えたツオーネなんか用済みってわけか。冷たいもんだね」

「そちらこそ〈アンデイ〉に御執心みたいだけど、あれが狂気と悪意の増幅器だとわかっているの？ 下手にあつかえば、制御できない怪物となつて新たなツオーネを作ることになる」

「ふん、なにを今さら、善人を気どつてる。その狂気と悪意に、わたしたちは真の信仰を見いだしたんでしようが」

こみあげる憎悪によつてか、操縦士の声かふたたび濁つた。

「諸人こそりて〈アンデイ〉の夢に祈りを捧げるとき、脆弱な人類に進化の道が啓かれ、宇宙の深淵を流れる暗黒の力を操る技が示される。

——黙示録にもそう書かれてる」

「魔女の予言は実現しない」

黒衣の女が低く陰鬱な声で、不吉な詩に応じた。

「人間は、……凡人には、人間をやめてまでBETAと戦う意志などありはしない。〈夢見るアンデイ〉の中で物質的に脳を連結しても、超人的考察力は得られなかった。狂った集合知能を形成するだけだとベルリンでもハバロフスクでも確認されている。難民の学者をどれだけ〈アンデイ〉に捧げようと、科学文明の救世主を生み出すことなどできない」

【神様がすてきな】アインザッツコマンドー 6 【特典  
をくれるよ】

「ホーエンシユタイン」

フォルシユトリヒが機械より大きな声で叫んだ。それは、ラヴゾンが思いだせなかった六六六中隊戦闘要員の名前だった。

「ホーエンシユタイン。我らが嘉する者。我らが兄弟は、エアフルトにあり。人間世界の終焉を望まぬならば、疾く行け」

「プロイエクツイオン？」

「BETAの再侵攻は近い。〈宇宙旅行協会〉の使徒よ、汝は姦計により、時を失いぬ。今やエアフルトは——」

「何いきなり話かけて来てるわけ？」

バラライカが三・六センチ弾を発砲した。

ヴァーゲンの外れかけていた幌が支柱ごとちぎれ飛んだ。

「余計なこと喋るな、マヌケめ。……んんん？ これは……この水槽、〃新人類〃じゃないよねえ。ひよつとしてへ夢見るアンディっというんじゃないかなあ？」

「〈宇宙旅行協会〉が、なんの目的でESP発現機を探す？」

カマーツに向けていた砲口を、バラライカは腕の巧みな操作だけで方向転換した。凡庸な操縦士ならばコンピューターに頼って腰の回転で上半身ごと動かし、重く不安定な機体を何秒も揺らしているところだろう。

人間がTSFの腕、砲を操作して重心をぶらすと、歩行用姿勢制御コンピューターは脚を操作して直立体勢の安定を保つ。

凡人基準の、BETAとの戦闘ですぐに死んでしまうニューリン<sup>グ</sup>機械科兵むけの教科書では「人間による主目的動作↓コンピューターによる補助動作」の順序で実行処理をくりかえすことが、時間はかかるが無難な、つまり信頼性が高い動作追従式ロボター操縦法であるときれている。

生身の存在がTSFと戦う場合、この何秒かの隙に軽捷な歩兵ならば遮蔽物へ走り、相応の武器があれば反撃もできるし、BETAならば恐れ知らずに距離をつめることができる。

しかし地獄からあらわれた甲冑騎士めいた、夜闇より黒いバラライカにはその隙がない。

「質問してるのは、こつちだよおっく雌犬ちゃん。背骨に電極ブツ刺された囚人みたいに答える。へアンデイへはエアフルトのどこにある？」

「……アメリカから食糧支援に来た企業が、四月に工場を買った。あるとすればそこか」

「そいつらがベルリンでへアンデイを焼いて——四月に？」

ラオトシユプレヒヤーが周波数を探す雑音を流し、男の声に変わった。ハンブルクに設備を間借りしたDDRラディオシユタツイオンの放送だった。

「——新政府の決断的交渉により国連安全保障理事会は今月一四日、ダンケルク計画の進歩的発展を承認しました。決議にともなってアフリカ統一機構は一七日、共和国市民の受け入れ増員に同意を示し、新たに二〇〇万人のカメルーン移住を」

「今日は何月だ？ 日付は！」

アンザーガーの朗読に、操縦士が質問をかぶせる。

「二月二〇日、……日曜日よ」

「曜日なんかどうだっていいでしょ！ バカなの？ 一月？」

「——『断固たるドイツ民族の意志が民主主義を勝利の剣となし、あらゆる混乱に進歩的解決の道を切り開く！ 我々の民主的意志は正義であり、正義とは力です！』」

「どうして未来へずれてる」

「——『革命軍は、旧体制が三六年かけて共和国市民から盗みとつたものを、三六時間で奪還しました。今も国連理事会を利己的に妨害するゾビエトは、自らが燃え盛らせた煉獄の炎の中に我々を投げ入れ』」

「使徒よ、聞け。我らが兄弟はへ冥土成聖騎士団へに囚われたり」

「——『かくも罪深きゾビエトは、その弾圧によって穢れた鎚を、もぎ

とったBETAが振るうにまかせた！　しかし我々是不滅の剣となつて炎の中から立ちあがり、人類の危機に』」

「かの者どもへ報復をなすべく、フォン・ユンツトは〈宇宙旅行協会〉の術に、すなわち汝の招来に干渉せり」

「——『アフリカを蝕む腐敗した搾取階級からの武装解除要求に、我々は決して応じません。ダンケルク計画を巨大な奴隷市場にしようとする企てる敗北主義者、日和見主義者の欺瞞的提案にも応じません』」

「そいつ、時間を操るなんて……報復とは？」

「——『我々の武装を言われるがままに譲り渡すことは、隷属の道に他ならないのです』」

「〈冥土成聖騎士団〉は人類の救済を決定したらむ。我らが兄弟に新たな呪縛を科し、大いなる術を構築しつつある」

「——『後方諸国の搾取階級は、オイローパに残された猶予が少ないことにつけこみ不当な干渉を』」

「二〇〇億の贄を捧ぐ、世界を時空回廊に封じる、かの者どもの企てをフォン・ユンツトはBETAを用いて——」

数度の小さな発砲音がフォルシュトリヒの叫び声を止めた。

「——『彼らは現代民主主義文明の祖たるオイローパを滅ぼし、軍事独裁をも正当化して、全世界をプロレタリアートの完全支配へと』」

「こおおの、クソ犬！　どうあつてもバラバラに引き裂かれないみたいだね！」

「——『それを避けることが不可能ならば、全権指導部は力の決断的行使をもつて正義をなし、共和国市民、全ドイツ民族、およびカメルーンの虐げられた人々に幸福ハイルをもたらします』」

「地獄から帰るにさいして、わたしも神器を授かっているね」

「ああん？」

「——指導者ウルスラはNATOとの協同会議でこのように声明し」

「BETA群でも人類軍でも大隊規模なら、これ一つで皆殺しにできるわ……〈ザ・クリムゾン・オブ・デス〉！」

「——さらなる総括的努力をアフリカに求めて」

「セットアップ」

【ラッキー☆】アインザッツコマンドー 7【チャーネル】

？

「モード、サーマル——」

「遅い！」

硝煙を撒いて、バラライカが三・六センチ砲を全力射撃した。

三・六センチ榴弾の殺傷半径は、非装甲の人間が相手ならば一〇メートル前後になる。

数十発も撃てば直撃させるまでもなく、炸裂破片により人間ならば確実に自動小銃の七・六ミリ弾を浴びせたような死体になるし、驚異的に敏捷なバルルス・ナリスが相手だとしても深手を負わせられる。少佐と呼ばれていた雌犬は死んだ。

ラヴゾンは「シャカリキヤッター！」と彼が信仰するブツダの加護へ、口から血反吐混じりに祈りをこぼした。あとはバラライカに、近くの病院へ飛んでもらえばよい。

ラヴゾンは共和国指導者 ウルスラ・シュトラハヴィッツの乗機を整備していたことがあり、革命英雄 テオドル・エーベルバッツハの知り合いでもある六六六中隊の古参隊員だ。そして旧体制崩壊直前の重要な時期に、シュタージから依頼を受けて活動した協力者でもある。バラライカを操縦する死んだとばかり思っていたホーエンシュタインは、きつと助けてくれるはずだ。

なにかが「ガン」と音を立てて、カマーツ操縦室のダハに当たった。ぞんざいに固定されているラオトシユプレヒヤーが、発していた雑音を急激に増す。

硝煙を吹き散らす寒風に、黒衣がはためいていた。

「モード、サーマルフォース・デイスジャンクシヨン」

金属の錫杖を突いてダハに立ちあがる女は、TSFへの音声認識指令のように、明瞭な英語で言った。どのような方法で数十メートルを移動し砲撃をかわしたのか、その姿は無傷だった。

何者かの虚ろな声が「ターゲット、キャプチャード。エミユレーテッド」と応じる。

方向転換を終えたバラライカが、カマーツへ向かって歩き始めていた。

回避されたせいか、幸いにも再砲撃は選択しなかったらしい。あるいは水槽から出て動くことはできそうにないESP発現機とやらをまぎぞえにしたくないのだろうか。

T S Fは『一步』の動作に、足を大きく上げなくともよい平坦地で二秒を要する。また、歩兵や爆弾を隠しやすい車輛からは数十メートルの距離をとっておくことが対人戦闘の常識だ。

当然そうしていたバラライカが六く七歩を移動し、腕による攻撃をおこなうまで、まだ一二秒はかかるということだった。

「これは、T A S——」

「そんなガラクタでは遅すぎるわね」

暗黒色のバラライカを、走査するように虹色の輝きがなめた。

「レディ」

「シユート」

長さ一〇メートル、本体だけで四トンの重さがある携帯突撃砲が、一瞬で赤熱した。

弾倉が爆発的に紅蓮の炎を噴く。炎に包まれながら突撃砲はさらに黄白色となり、形を保てず飛沫となってカマーツに降りそそいだ。管制装置から異常を伝えたのであろう突撃砲を、バラライカが敵のいる前方へ投げ放ったのだった。

落ちてきた高温の突撃砲部品がESP発現機の水槽を破壊し、臍物臭い蒸気と大量の液体をラヴゾンは浴びた。

突撃砲を瞬く間に熔解させた、レーザー照射といった手順をとまわらない謎の現象をホーエンシユタインが知っていたとしても、実際対処することは非常に難しい。歩行時には大きく揺れる操縦室で腕を操作し、生身の歩兵以上の機敏さでT S Fを行動させるなど、人間技ではなかった。

下からの突風がカマーツを揺さぶる。武器を失ったバラライカが

ラケーテンアントリップを始動していた。

「なぜそんなものを持つている？ 科学を嫌う魔女どもが！」

建物のむこうへ、肩のラケーテンヴェルファーから小型弾が放たれる。対BETA戦闘では囷として使われる無誘導弾による牽制だった。

「まさか、反乱軍ごときが〈協会〉と取引できたのか！ 答えろ、クソ犬！」

一〇〇万個の電球が灯されたような温かさと明るさの中で、おぞましく醜悪な怪物が悲鳴をあげている。

光に退けられた夜闇の奥へ、噴進飛行の重い轟音が遠ざかってゆく。

激して問いかけるバラライカに、燃え始めたカマーツからの応答はなかった。

遠い暗雲を、禍々しくも幻想的な閃光が何度か照らして、荒れ果てたマルクトプラッツの駐車場に静寂が戻った。

カマーツが焼け爆ぜる音は、寒さに苛まれたラヴゾンにとって騒々しいものではない。かつて家族と暖炉を囲んだときのように、恋人と燃料缶の粗末な竈にくっついていたときのように、心に安慰をもたらしてくれる慈悲深き音色だった。

ブツダの光輪と同じ色の炎が荷台に落ち、ラヴゾンの視界から廃墟の闇を隠した。

悪夢からあらわれ彼のなにもかもを否定していったあの存在どもが、ふたたび這い出してくることはないだろう。数トンの熔解した金属で、カマーツも冒瀆的な積荷も灰と化す。

それに、ラヴゾンはもう夢を見ないからだ。

【どいつさんのぷれいすは】超時空魔法少女グレーテ  
ル 0【とつてもゆっくりできるね！】

危険はせいぜい夜盗に襲われるほどのものだろうと思っていた  
『ちよつとした調査旅行』は、信じられない結末を迎えつつあった。

ハンブルクの出版社を個人的に訪問してアメリカの驚くべき科学  
進歩について陰謀論混じりの話を聞く、というささやかな情報収集を  
するつもりが、なぜか魔術師の弟子にされ、なぜか人間世界を支配し  
てきた超人の秘密結社に追われ、今は地球で最も新しいハイヴ<sup>ホルト</sup>にい  
る。

おまえが進む先に人類を救うすばらしい真実などない。引きかえ  
せ。

引きかえさずに破滅した先人が残した、その警告は正しいものだっ  
たのかもしれない。

目の前には、自らが求めた“世界の秘密”の常軌を逸した解答が広  
がっている。

ベルリンの地下深くに隠された広い〈最高指令室〉で、前を〈冥土  
成聖騎士団〉に、後ろをBETAに塞がれ、グレーテルは進退窮まっ  
ていた。

「本来の計画では、フランクフルトあたりに作らせるつもりだったの  
ですが」水族館規模の破壊された水槽を背にして一人で立つ、騎士が  
言った。「なかなか思うとおりには進行させられぬようです」

旧体制の人間に放棄された後の〈最高指令室〉には、壁の一面を崩  
して溶岩洞窟のような横穴が繋がっていた。ブンカー最深部のさ  
らに下へと斜めにつづく横穴は、直径が少なくとも一五〇メートル、  
おそらく二〇〇メートル近い非人間的な大きさの、BETAによる構  
造体だった。

黒々と開いた穴の底、床が水平になっている数キロメートル先の踊  
り場か、または別の階層にはチェレンコフ放射めいた光を放つ、なに



かがある。

「作らせる……う？　〈最高指令室〉のことか？」

中世の屠殺屋を思わせる黒革のシウルツェをまとう騎士に、グレイテルは疑問を返した。

ここはドイツ民主共和国の、打倒した旧体制の、真の権力中枢だった。尊大なその名は、ごく限られた関係者だけが知る。

焼き払われた痕跡がある水槽には、圧倒的に強力なESPで政府の構成員を支配した、人造超能力者が浮かんでいたはずだ。

ハンブルクにあつたフェアグニューングス・ゲヒルン社が、地球戦争が始まる二カ月前に出版した怪しげな書籍（表紙絵など確信的に怪しげだ）には、ESP発現機とも呼ばれるそれは『化学合成された有機コンピュータに、古代の冒瀆的な秘術を入力した、輝かしい宇宙開発期の陰に隠れた狂気の産物なのである！』と説明されている。

狂気を複写転送して人間の精神を変質させてしまうESP能力がどこまで届くのかは、書籍では不明とされ定かではない。收容所まで生きている旧体制派を調査するといった手間どることは、している余裕がグレイテルにはなかった。

とはいえ仮にESP能力がBETAの「超知覚」なみに広大な有効範囲だったとしても、ナチス政権以後も変わらず政府があつた地上のベルリンから、六〇キロメートルは離れているオーデル・フランクフルトに〈最高指令室〉を築こうとするとは考えづらい。

「まさか、BETAに、このホルトを？」

「ええ、そうですよ……ベルリン・ホルトを観光に来たと思つたのですか？」

日本刀を杖にしてたたずむ騎士は、髪を揺らして小首をかしげた。

この女もグレイテルの師と同じく、BETAの本拠地を、一泊二日で異星旅行気分が味わえる遊園地だと思つているらしかった。

「フランクフルトを、なぜBETAに——ベルリンを死守させたいはずではなかったのか？」

「それはシュタージにやらせるつもりでしたが、予定が狂つたのです……シュミットさんにも困つたものですね。飼犬に噛みつかれて

死んでしまうとは なさけない」

「シュミットは……」

暗く遠い穴底へグレーテルは目を向けた。

巨大な穴の壁もかすかに発光し、奥にいる異星の者どもの輪郭を照らしている。グレーテルが持つ電灯の明かりは、BETAが開けた穴の半分に満たない直径であろう〈最高指令室〉の端までも届いていない。

エーリヒ・シュミットの死から七日で、東西ドイツ政府の協同会議は国土を放棄する『総退却』の決定をなし、その四〇日後にはブランデンブルク州が無人化されたと革命政権は宣言した。

動かせない設備を捨てて東西ドイツ軍がエルベ川まで撤退し、この地域を監視できなくなつてからわずか五カ月のあいだに、ミンスクを拠点とするBETA群は最低でも一億トンの岩石を掘削してのけたということになる。

「ここには、エーリヒ・シュミットが〈ドイツ民族の真なる指導者〉と名づけた存在がいたはずだ」

絶望的な力の差から、グレーテルは注意を騎士へ戻した。

「その人造生物がどうなったのか、教えてほしい。わたしはそれを確かめるために来た」

「彼らは破壊されました」

通りすがりのベルリン・ホルト・ニ<sup>ノ</sup>イ<sup>ニ</sup>リン<sup>グ</sup>グに閉園時間でも尋ねられたような気軽さで、相手は答えた。

エアフルトの収容所では、そんなものは実在しないと張り張るシュタージの幹部から、解剖室と電撃針を用いて聞き出さねばならなかった情報だった。

「破壊とは、誰によつて?」

「あなたたちが好む言いまわしをすれば、アメリカの手先によつて、となるでしょうか」

「ここを襲撃した特殊部隊が〈宇宙旅行協会〉なら、それは……、彼らは手先ではなく、むしろアメリカの恵み深き君主なのでは?」

解答を述べることをためらい、核心から言葉を反らしたグレーテル

に、騎士は物憂い頬笑みを見せた。

「そうかもしれないですね。科学を神と信じる者にとっては」「宇宙の真理が神であるならば、科学はそれに近づく確かな手段だ。彼らが与えた科学技術によって、人類はBETAに抗しえてきた。あと一〇〇年分、技術を進歩させれば、人類は地球での戦いに勝てるようになる」

「それは楽観的にすぎる希望だというべきでしょう。現実には、地球人の社会は食料の不足により崩壊し始めています。進歩への正解を教えてもらったところで、物質文明の向上は一朝一夕になせることではないのです」

「人間をESPで洗脳すれば社会の崩壊を止めて、時間や叡智を与えられると？ シュミットの怪物は共和国を狂った地獄に変えてしまった。物質文明の不足を補うどころか、我々を破滅へ向けて突き進ませていた」

「善良な若者に心苦しい指摘をせねばなりません」

宗教画めいた微笑を保ったまま騎士は息を吐いた。

「まず難民統制居留区という地獄が、統一党によってツオーネに作られたのです。地獄の穴を掘り、そこへ一五〇〇万の難民を突き落とし共喰いをさせていたのは、あなたたちです」

「……なだれこんできた難民は膨大で、盗賊的でもあり、食料を供給することは不可能だった。統一党には共和国市民を優先する義務があったし、戦争への準備を強いられてもいた」

「そのとおりですね。彼らの対策は、妥当なものといえるでしょう。〈ドイチユ民族の真なる指導者〉に意志の統率を助けられ、限られた食料を正しく分配し、社会の崩壊を防いだのです」

「……」

「数年前から、難民の脳を用いて粗雑に改造された〈真なる指導者〉がアーネンエルベの手に負えぬ不良品となっていたことは事実です。しかし問題は、このようにして解決されました。もう心配はいりません」

騎士の目的は、自分を殺すことではない。グレーテルはそれを察し

た。

たやすく消せる自分をここで待ち、わざわざ話しかけている理由は、殺す以外の用件があるからだ。

「三月二八日、シユミットの怪物をへ宇宙旅行協会へバラバラにして持ち去った」

ハンブルクで取材して得た情報をグレーテルは告げた。別大陸移住予定者の仮設待機所へ逃げこんでいた、BNDの作業員から聞き出したことだった。

寝泊まりできる簡易施設にされた倉庫街で見つけたとき、彼は悪夢と麻薬で、ほとんど廃人になっていた。支援物資を横領してブラジルへ行くだけの財を蓄えていた敏腕作業員だったようだが、へ夢見るアンデイへと西側のBNDは名づけたへ真なる指導者へにESP能力で攻撃され、精神を砕かれてしまったのだ。

地球戦争の最前線にいたグレーテルは、人間の悲惨な最期を見慣れている。

しかし、あれほどまでにすさまじく人間性を破壊された喋る肉塊は、解剖拷問台につながれ剥き出しにされた神経に電撃針を刺しこまれた囚人の他には、見たことがなかった。

彼が支離滅裂なつぶやきのあいだに語ったことが事実であるならば、ベルリンから悪夢じみた秩序が消え失せたあの日、ベルリンの人々が超集合意識に強いられた譫妄から目覚めて、自由な意思を回復したと愚かにも信じたあの夜、この場所でもう一つの決戦がおこなわれた。

攻撃者は『アメリカの奇妙な特殊作戦部隊』だったらしい。武装警察軍が暴れるベルリンへやってきた一団は、内戦にまぎれてへ最高指令室へを襲い、そこにあるものを略奪していった。

部隊の案内が任務だった哀れな作業員は、へ最高指令室へ上層の核ブロンカーまでつきあわされ、そこで放射線にも似た狂気の投射を浴びたという。

「ポリシエビキを支配する “新人類” に対抗できるものを国家安全保障会議は、ここから略奪したもので作ろうとしているのか

もしれない……他人の失敗に学ばない、愚かな試みだ。自信過剰なアメリカは新たなツオーネになってしまい、冷酷にも〈宇宙旅行協会〉はそのような統治体制を望んでいるのかもしれない。だが、それでも……〈宇宙旅行協会〉は、共和国の救世主だ。ベルリンをBETAのテラリウムにしようなどという忌まわしい計画を、叩き潰してくれたのだから」

## 【魔女が】 超時空魔法少女グレーテル 1 【いる世界】

それなりに暖かくなった七月の上旬、退院を考えていたグレーテルのもとに連邦共和国——西ドイツから予期せぬ見舞い品が送りつけられた。

差出人はヨアヒム・バルク。知り合いの西ドイツ軍人だった。

市販の書籍と、医療業界の電磁媒体化された会報誌がいくつか、開閉器が嚴重な密閉式になっている魔法瓶のような容器に入った膏薬が一つ、これらの内容物に「我が戦友、小さなグレーテルへ」のふざけた一文がそえられていた。

長くつづく〈核の冬〉は、植物を貴重なものとし、人々の日常から紙を奪っている。人民共和国では一九七八年を最後に、紙製の書籍は大量生産が途絶えてしまった。

病院へ送られてきた西ドイツの出版物も一〇年以上前に発行された古本ばかりで、ヨアヒムの意外に達筆な一文も、軍の支給品らしき媒体のクンストシュトフ部分に書かれていたものだ。

小さな低品質動画で喋るヨアヒムは「効能がすごい最新の傷薬が手に入ったから送る、使いかたは塗るだけ、詳細は同梱した専門誌を参照」と郵送物の中身のことを簡単に説明した。

数年前に作成されている医学誌には細胞を賦活する画期的新薬の記事があり、使用してよいものかグレーテルが意見を求めたエアフルトの医師も、そこを読みながら「噂を聞いたことはある」と言った。

ヨアヒムの好意を疑うわけではなかったが、不信と裏切りが満ち満ちていた社会に育った者の習い性として、まずグレーテルは他の患者の注射傷にその膏薬を試した。

油性なのか妖しい輝きをおびた膏薬には、医師が目を見張って驚く効果があった。痣になっていた注射傷はトウモロコシ粒ほどの粘液質な薬剤を乗せただけで、目に見える速さで治癒したのだ。新しい皮膚の下にまだ大きな凹みがあったグレーテルの銃弾傷も、三時間で跡形もなく消えてしまった。

皮下注射の必要もなく本当に塗るだけで皮膚に吸いこまれてゆく薬を観察しつつ、ちよつとした暇潰しにとヨアヒムが薦めていた本を、グレーテルは手にとっていた。

『タイムトラベラーズ ―アメリカ合衆国における驚異的科学進歩の真実―』。

ハンブルクのフェアグニューグングス・ゲヒルン社が、一九六六年に発行した（原書はアメリカで、聞いたこともない会社により前年に出版されている。届けられた書籍は、それをドイツ語に翻訳出版したものだ）厚いタッシェンブーフだった。

始めは鼻で笑いながら、最終章は傷痕が消えた腹に冷たいものを感じながら、アメリカ軍産複合体の技術が他国に五〇年は先進している理由を読んだグレーテルは、既に夕方になつていたが病室を引き払い、臨時政府エアフルト総合庁舎へ出向いた。

ヨアヒムと直接に通信し、贈り物にはなんの意図があるのかを聞くためだ。

四時間かかつてつながった電話で、ヨアヒムは「イエツケルンで、六六の小さい政治将校か！」と開口一番、同じネタをかました。

「イエツケルン大佐から電話つて言うから、誰かと思つたぜ」

「大佐になつたんだ」

「おいおい、出世しすぎだろ。すげーな革命」

「統一党の後始末――指導もあつてな。まあ、無理な人事であることは承知している」

「末期ヴァイマル的インフラツイオンな人事つてか。それでも、出世するのはいいことだ。まず、給料があがる。ついでに権力の証明にもなる」

「まだ追認投票もされていない政権が、証明か……革命英雄の極端な昇格は、権力の誇示と言つたほうが正確だ」

「誇示で揉め事を抑止できるなら結構なことじゃないか？ 投票より避難が先つてのも、正しい選択だろう。おれは革命政権を支持してる」

「それはどうも」

「発展的レーベンスラウム建設もな」

「それは意外だ。あの、まともな説明もない計画を？」

「エルベ川あたりが仕事場だと、東の友達もたくさんできる。大衆向けの広告とは違う、本当の話がそれなりに聞こえてくるもんだ」

「大衆向けの綺麗事ではない話を聞いて、計画を支持するのか」

「そうとも。似たような難民向けの詐欺話は、西側にも以前からあった。だが、そっちは本気でやるつもりなんだろう」

「ああ……、エングラントの犯罪か。難民に暖かいアメリカへ移住し、新しい家と農場と工場を作ろうと夢物語を吹きこんで、実際にはカナダへ送ったという」

「カナダ送りは陰謀論ってやつだよ」

ヨアヒムの声に苦いものが混ざった。

地球戦争が始まった頃には、彼は創設期のTSF乗りとして仕事場に出ていたはずだ。

「汚染されたカナダではほとんどが冬を越せず、一九七六年から毎年五月になると何百万人もが追加で輸送された、と聞いている」

「そこら中にあふれかえった難民がどこへ行ったのかは知らんがね、たぶん、あいつらは今でもよろしくやってるさ。こっちの政府は大それた悪だくみはしないことになってる。西側には言論や報道の自由があつて、港に強制収容所を作ったりしたら、すぐにバレるからな」

西ヨーロッパ諸国は〈核の冬〉が地球規模で、予測できない期間、環境を悪化させることに気づくと、駐留ソビエト軍がカザフスタンへ去り動揺する東ヨーロッパとの国境を封鎖した。NATOが一元的に管理した西ヨーロッパ諸国のTSF部隊にとって初陣となったのは、こうした東からの難民が押し寄せつづける新しい紛争地帯だった。

少女だったグレーテルがあのととき見ていた圧倒的に巨大な黒雲の下で、どれほどの東方難民が、誰によつて、どんな目にあわされたかは統治体制の破壊が同時進行していた東側では記録されていないし、調査されてもいない。

「読書家の大きなバルク少佐が言うなら、そうかもしれないな」

グレーテルは溜め息をついて、世間話を終わりにした。



「とにかく、薬をありがとう」

「薬？」

「そちらから送ってもらった」

「おれは薬なんか、送ってないぞ。うちの隊員の誰かが送ったってことか？」

「本と一緒に傷薬を、わたしの入院先へ送ってくれたはずだが」

「本？ おれが……、えーと、話がよくわからんのだが、あんたの入院先は警護の必要性から機密になってる。おれはあんたがどこにいるか知らんし、なにも送っていない」

「……『ハーイ♡ グレーテル。調子はどうだい？ なに、傷が痛くて一人じや寝られない？ それならこの薬がお勧めだ！』から始まるバルク隊長の宣伝動画もあったが」

「ハッハッハ！ そいつは見てえ。いや、よせよ。おれは威厳ある大隊長さんだぜ？ そんなもん、よくある偽造動画だろ」

見舞い品を郵送したことを否定したヨアヒムに、グレーテルは念のため書籍や容器の写真を見てもらった。

電話回線で画像を逐次に送ると、ヨアヒムは「こんな薬壇は見たこともない」「おれはマッチョだ。こんな女みたいな字は書かない」「おれはマッチョだ。筋肉とも武器とも戦争とも関係ない軟弱な本は読まない」と逐次に答えた。

深夜に一時間ばかりも協力してくれたヨアヒムに礼を言って、グレーテルは通信を切った。

エアフルト総合庁舎には待機室を兼ねている二四時間営業の食堂が、西側から電力や浄水器を供給されて設けられていた。ここだけではなくグレーテルがいた病院も、テューリンゲンからザクセン・アンハルトを守る人民軍も、同じく西側の力によって維持されている。

あらゆる不動産、何世代もかけて築いてきた生産基盤のなにもかもを捨て去る『総退却』を選択した共和国は、もはや自力では存続できない。

国家なる奇怪な崇拜対象がその魔術的求心力を失い瓦解してしまう前に、革命政権は残された軍事力を『正しい目的』に、すなわち新

たな生存圏レベンスraum獲得というドイツ民族にとって有益な実現可能な目的に、そそぎこまねばならない。

移民計画に関して西ドイツ政府は、口先ではあれこれと綺麗事を並べながら裏では完全に革命政権と手を組み、生存圏確保への支援を約束していた。

EU諸国も似たようなもので、アフリカへの大規模なレコンキスタが決定的となりそうな情勢を、その汚れ役はイスラエルにつづいて東ドイツがやってくれそうな事態の進行を、密かに大喜びしているらしい。

無知化教育以前の世代に、ヨーロッパ人の大群は移住先で現地社会と仲良く相互発展できる、などという夢物語を信じている者はいない。資源は有限であり、人類は地球にBETAが到来する何千年も前から、これらを奪いあつてきた。環境が悪化するほど、自分たちの勢力圏が狭まるほど、人類はBETAとよりも自分たち同士で熾烈に争わねばならなくなるのだ。

ドイツ民族の生存圏をユーラシア大陸の外に、軍事力を用いて確保する。

ヨアヒムならずとも、ダンケルク作戦とNATOが称する脅迫的移民計画や、それを独自に修正したさらに胡乱な革命政権案の真実に、まともな教養があるヨーロッパ人は薄々は感づいている。

身分証を見せるだけで皿に大盛りのヴルストをもらえた食堂で、グレーテルは席をとって二冊目の本を開いた。

一九七三年刊『騎士団の城 — 魔女が世界を支配する日—』(原著者は『タイムトラベラーズ』と同じチャーリー・ライアンなる謎めいたアメリカ人だ)。読まずにはいられない題名だった。

革命の夜に恐るべき才覚を發揮したウルスラ・シュトラハヴィッツは、熱狂を従えて共和国を掌握し、今や西ヨーロッパをも意のままに動かそうとしている。

この三カ月、グレーテルは多忙なウルスラと会っていない。旧体制に与していた人間への情け容赦ない処置、カメルーンでおこなおうとしている恥知らずな裏切りから始まる予定の征服戦争は、六六六中隊

に居着いてしまった無邪気な西側の少女とは別人が指導しているか  
のようだった。あるいは、悪魔との契約によって力を得て、性格まで  
変わってしまった魔女であるかのようにだった。

革命英雄に握手を求めた料理人が持つてきてくれた秘蔵の葡萄酒<sup>ヴァイン</sup>  
を賞味したグレーテルは、空腹に気づいてヴルストにも口をつけた。

三カ月も病院食ばかりだったせいかわ、素朴な塩味の豚肉は驚くほど  
美味に感じられた。

## 【RMR】超時空魔法少女グレイテル 2 【光の書】

？

チャーリー・ライアンの主張によれば、この世界には未来人が存在する。

もちろん、それは宇宙開発期に流行したSF映画に出てくるような、ツアイトマシーネに乗って時の流れを自在に旅する『荒唐無稽なウルトラテック・ヒーロー』ではない。未来を夢の中で体験するとう、ある種の予知能力を発現させた一族、または一団のことだった。

客観的に過去へ移動したわけではなく意識だけが時を飛び越えるのなら、時間旅行者というよりも超能力者と考えるほうが自然であろうが、ライアンは彼らを未来人と定義している。彼らは自らがいる時代を重要なものとせず、夢に見た来るべき時代に価値の基準を置いていたからだ。

日々の何分の一かを現実そのものの未来ですごすという彼らが、どちらをより価値ある世界とみなすか？ 彼らは未来に生きているのである、とライアンはその哲学性を表現していた。

おそらく二〇世紀の初期、第一次世界大戦へと燃え広がることになる騒乱の気配を人々が漠然と感じていた一九一〇年頃、彼らはアメリカ合衆国にあらわれた。まだ若く未完成な国だったアメリカを征服し、夢見た世界を実現させるためだ。

ラケーテを人工衛星にするという発想が、狂人の妄想ではなく空想科学なのだと大衆がようやく理解したばかりの時代に、彼らは星々のかたへ船を飛ばし、彼らにとっては遠くない未来に壊されてしまう人類の揺り籠・地球から文明を旅立たせる準備にとりかかった。

他天体への移民、そこでの戦争は、この当時から既に決定的方針あるいは避けられない運命であったことが窺える。月、火星の探査に必要な天文台と、実用には遠い原初的なものながらラケーテやロボター技術の研究者抱えこみを早くも始めている。

かくも遠大な目的を秘めていた彼らではあったが、やってきたニューヨークでとりあえず手つけた仕事は、墮落したブルジョワ金

融業者から資産をぼったくる証券取引だった。

未来を知っていれば成功する可能性が高い、しかも合法的な金儲けからアメリカ征服を始めたことは手堅いと評するべきなのだろう。

共産革命の華々しい成功を歴史の授業で教わったグレーテルとしては、いささか小悪党じみているというか、みみっちい活動をしている印象なのだが、彼らは本質的に秘密結社であり、しかも新会員の一般募集など決してしないから、こうした手段を選ばざるをえなかったのだ、とライアンは述べている。

世界大戦期の投機に詳しいライアンの調べによると（もともとライアンはアメリカ金融業界の調査を得意とする記者だった）、同時期にアメリカ経済の支配者となるべく連邦準備制度<sup>F.R.B.</sup>を成立させようとしていたマネートラストは、自分たちの縄張りで荒稼ぎする成りあがり者の存在を、かなり早くから嗅ぎつけ警戒の網を巡らせていたらしい。普段は家畜小屋のブタのように互いを押しつけあってばかりいる搾取階級も、貧者が自分以上の金持ちに成りあがるうなどとする不愉快な変事には、醜悪さが増す団結を見せるのである。

マネートラストは金融恐慌が頻発した当時の機密文書に「未来からの注文を見逃すな」と書いているようで、これがアメリカの歴史に彼らが臆気な姿を捉えられた、最初期の記録になるのだった。

それから半世紀後の一九六四年、『タイムトラベラーズ』が執筆された時点では、彼らは莫大な資産を有し、数千の企業を運営し、無数の超先進科学を研究する勢力となっている。そして、高まりつつける全面核戦争への不安を利用してアメリカ連邦議会や軍産複合体を従え、理想世界を実現する次の段階にいたっていた。

ソビエトに対する自分たちの優位は消失しているのではないかと、この時期に、彼らは軍産複合体に大盤振る舞いした。アメリカの大衆にとっては憂鬱な冷戦からの脱却、輝かしい季節の始まり、人類の文明が頂点に達した宇宙開発期の始まりだった。

一九六〇年代前半、『作り話のような降って湧いた躍進技術のバーゲンセール』の出所を探ったライアンは、それまで都市伝説だと思っ

ていた未来人の実在を確信するようになったのだという。

ユーラシア大陸を睥睨するアメリカの宇宙港から発進した資本主義陣営の記念碑的集大成、無人探査船イカロスIが○。一光速を超えて太陽系を離脱したその年、これまでとは分野を変えた新作にライアンは暗い予言を記した。『タイムトラベラーズ』最終章は、ライアンが会った未来人の言葉を伝えたものになっている。

人類は、火星から到来する宇宙生物に蹂躪される。

戦争により地球環境が損なわれ、人類は猛烈な飢饉に襲われる。

勝敗はわからない。ユーラシア大陸へ宇宙生物が降りた場合、攻撃が難しいからである。

我々は既に、戦争と飢饉に対処する準備を進めている。

グレーテルは『騎士団の城』を読むあいだに中身がなくなっていた酒壺を置き、皿に残るゲベックに見てくれは似せてある合成食料をつまんだ。

これは麦類から作られたものでも、悪化した環境に適応できる雑穀、芋類の加工品でもなかった。光合成により人類の生態系を支えてきた植物に代わる、温めた海水を動力源として蛋白質や糖質を合成するプランクトンを加工した塊なのだ。

BETAとの戦争を継続する力は、この合成食料が世界人口の六〇%に供給されることで保たれている。

農業や漁業が〈核の冬〉によって壊滅すること、プランクトンを材料とする合成食料が主食になること、さらにそれが世界のどこへ、人口のどれだけに供給されることになるかも未来人は正確に予言していた。『神の奇跡のように好都合なプランクトン』を作出し、大量養殖しているのは、他ならぬ彼らだからだ。

世界各地にある合成食料生産施設はアメリカやソビエトが先見の明で、こんなこともあろうかと冷戦期に建造したものではない。核爆弾の発明以前から“ある財閥”が研究、開発していた地球戦争へのそなえだった。

二五億人の需要を満たす合成食料の生産は、常識で考えられる一財閥の能力を大きく超えている。

金儲けを目的とする資本主義社会の企業では、そもそも核戦争がおきなければ巨額の赤字を出すに決まっている大規模な生産施設を前もって築いておくことが難しい。

自家用核ブンカーは核戦争前の豊かな時代だから売れる贅沢品なのであって、味気なく安価でもない合成食料は核戦争後の飢餓状態では売れないし、そして第三次世界大戦の後には、現実の今がそうであるように貨幣経済や自由市場など破壊されてしまう。「ゆえに食料の代金は工場奴隷めいた労働力の提供で支払ってもらおう」などという経営計画に出資するアメリカの良心的ブルジョワジーは、冷戦期にはいないだろう。

数十億人を生存させる合成食料の大量生産施設は、彼らが諸国家の上に立つ唯物的専制君主となるために、自己資産だけで秘密裡に整えてきたものなのだった。

一九七四年七月、アサバスカ決戦で六〇〇メガトンを超える核火力が集中使用され、地球は〈核の冬〉に包まれた（六〇〇メガトンはアメリカ軍が九六時間以内に緊急投射できるとした核火力の最大量だ）。

人口が多く貧しい国々では数カ月で備蓄食料が不足し始め、超大国にも数年以内におとずれる飢餓地獄に対して為す術はなかった。

このときを待って彼らは次なる段階、独占食料の配給管理による社会支配に乗り出したのだ。

ライアンとの一九六四年の会見を、人類が窮途を歩む二一世紀の初めから戻ってきたという彼らは、こう締めくくった。

これらの予言が成就されるとき、我々は人類世界を支配している。数々の恐るべき予言が現実となった一九八三年の今、彼らへ宇宙旅行協会へは、告示したごとく人類世界を支配していた。

【カーネル】〈宇宙旅行協会〉 1 【キンタ】

ジェット推進の大音響で目を覚ましたラ・キンタは、なかば無意識にベッドから転がり出て、愛用のガンベルトをつかんでいた。

素足で触れた床は、三月も末だというのに氷のように冷たい。ここ東ドイツは、戦局や政治情勢だけでなく、気候まで劣悪な国だった。

暴風でガタガタと仮眠室の二重窓が大きく鳴り、カーテンまで揺れている。五〇A E弾を連射できるグレートイーグル（バルルス・ナリスを止められる携帯武器として、アメリカ合衆国で一〇年前に製作された最新の拳銃だ）を抜くと、ふらつく寝起きの体をラ・キンタは頑丈な外壁柱に預けた。カーテンをあげて外を覗く。

まだ夜の空を、ずんぐりした巨体なりの全速で飛びすぎてゆくT S Fの群が見えた。ミグらしき機群の、東西条約を無視した低空飛行だった。

市街の五〇ヤードたらず上で水平に散開した数十機は、オーデル戦線への増援ではない。西ベルリンの領空を通過するや否や、東ベルリン市街に機関砲弾をバラ撒いていた。

ミグはベルリンに到達したB E T Aを迎撃しているようすでもなく、おそらく撃っているのはシュタージ武装警察軍が大型ビルディングに設置したミッテ区の機銃陣地だ。これは内戦だった。

「やれやれ、またかよ……。正気か？」

つい先日、武装警察軍は東ドイツ政府の『西側への売国的逃亡を企てていた戦闘忌避者ども』を公然と、兵器を用いて粛清した。

統一党が支配していた議会は沈黙し、そして外国人にはなにがどうなっているのか理解できないうちに、シュタージの長官が東ドイツの新しい最高指導者になってしまった。形式だけであつても民主主義に基づく政権が自国の軍隊に倒され、まったく非合法的な軍事政権が承認されたクーデターがおこなわれたのだった。

「へえあ……へい、ボス。どうなつてんだ？」

反対側のベッドで体を起こしたチョッパーが寝ボケた声で尋ねた。



「こつちが聞きたいぜ……今、西から来たのは人民軍だな。ウエスト・ベルリンを楯にして突っこみやがった」

「あれは、イースト・ジャーマニーの正規軍なのか？ 街を撃ってんだけど」

「ああ、シュタージの陣地を撃ってる。だるい宣伝放送をしていた、西方総軍とかいう奴らだろう」

『おい、シュタージ。話し合いに応じるなら許してやる』キリツ！  
とか言ってたな。だが、西方総軍にTSFはないぞ。人間相手の兵力だかね」

ラ・キンタはブーツを履きながら言った。

「そこは賛同者を集めたんだ。タマなしクソ野郎どもかと思ったが、放送はただの時間稼ぎだったようだな」

『残念でした、時間切れだ！』ってか。オーダー戦線よりもベルリンでゲヴァルトが先とは、フリーンカザンしてんね。なんたる歪みねえ民主主義！」

「シュタージは、この国の全員を敵にまわした。これまで他の正規軍がおとなしくしていたのが不思議なくらいだ」

ガンベルトを巻いて三階の廊下へ出ると、向かい一面の貨物集積所は騒然としていた。

現在の西ベルリンに一般市民は残っていない。〈核の冬〉発生と同時に本国への避難が始められ、入れ替わりにドイツ連邦共和国軍が進駐した。この貨物集積所は、西ドイツ軍基地の一部なのだった。

「核爆弾の威光ってやつじゃないか？ 弾圧体制を維持できたのは」

ビンゴ・ベガス社のトレーラーへ急ぐラ・キンタに追いついたチヨッパーが言った。

「こんな落ち目の国に、ソビエトが今さら核爆弾をくれてやるわけがない。あいつらは、もう核燃料を生産できないんだぞ」

「まあ、そうだな……。そのへん、白いのはハツタリでなんとかするつもりだったのかねえ」

ラ・キンタは集積所の外へ出ながら肩を竦めた。

エーリヒ・シュミットに独裁者の立場を与えている力の正体を、ラ・

キンタは知っている。これは嚴重に管理されるべき知識で、相手がビンゴ・ベガスの社員といえども考えなしに伝えてよいことではなかった。

増強一個師団に日用品を供給する集積所は、滑走路と基幹車輛道路に挟まれて物資を出し入れしやすい場所にある、大きな建物だった。トレーラーの格納庫は、ここから広大な滑走路の対岸に位置している。

緊急着陸にそなえて滑走路には立ち入り禁止の信号が灯っており、ラ・キンタとチョツパーは遠まわりで一五〇〇ヤードばかりを、自転車を借りておかなかったことを後悔しながら走らねばならなかった。

格納庫は西ドイツ軍の設備を一時貸与されているわけではなく、彼ら専用の、ほぼ治外法権の区画に社費で建設されたものだ。アメリカ合衆国のいくつかの巨大企業は資本主義陣営のあらゆる重要地に、このような拠点を規模の大小はあれ設け、社員だけではなく現地の情勢によっては傘下の傭兵をも配していた。

西ベルリンのここはドイツ人が食料輸送の仕事をしていただけの事務所だったのだが、何カ月か前から重要度が急激にあがり、戦力が派遣された。

民間軍事業務請負 ビンゴ・ベガス社への依頼は四週間前。カナダ崩壊の余波により、荒廃の一途を辿るメイン州 ウィスカセット近郊の自宅できつろいでいたラ・キンタに「穴埋めの待機部隊として西ベルリン基地へ急ぎで行ってほしい」という注文が入った。一七日前には五〇トンを引きける五輜のフル・トレーラーで、三〇機のMBAを依頼主の強襲揚陸艦からハンブルク経由で運びこんでいる。

思わぬ不都合が二つかさなり、依頼主は西ベルリン基地へ追加戦力を急送する必要を生じていた。

陥落が迫っている東ベルリンから脱出させたいVIP、すなわちエーリヒが力の源泉とする人造超能力者がとんでもないデブになってしまっていて、搬出するには数十人の作業班がいると判明したことが一つ。先に送った特殊なシステムを組みこんだTSFが、特殊すぎて起動不能状態になってしまっていることがもう一つだ。

そのTSF特別機が『お蔵入り状態』になっている格納庫では、陰気臭い修道服を華麗に着こなしたシスターIIステイージュが待っていた。

ビンゴ・ベガスへの依頼主であり、二五億の飢えたる子羊に食料を与えている超巨大な多国籍企業 ミドリIIヒシオズ製菓が擁する慈善事業財団の役員、ということになっている謎めいた僧形の女だった。

「シスター、攻撃しているのはイースト・ジャーマニーの西方総軍なのか?」

「そうです」

格納庫内の通信室から出てきたシスターIIステイージュは、いつものどおりの機械のように無感情な声で、問いかけたラ・キンタに答えた。

「先ほど、アルデバランの航空管制室から報告を——」

シスターIIステイージュはつづけようとした言葉を切り、新たな通信が入ったのか、ウインプルの代わりに着用しているヘッドセットに手を当てた。

ドイツ語はラ・キンタにはさっぱりわからない。ドイツ語での短いやりとりを終えたシスターIIステイージュは英語に戻して彼らに告げた。

「シユタージ政権を制圧する目途が立ちました。一時間後に、ここへTAS機の操縦士が到着します。ビンゴ・ベガスの皆さんも出撃準備をしてください。〈アンデイ〉救出作戦を実行します」

【急募！ 日給五〇〇USドル！ 食事、宿泊所つき】  
〈宇宙旅行協会〉 2 【ミドリⅡヒシオズ製薬・西ベル  
リン基地事務所】

？

ビンゴ・ベガスMBA戦隊をアメリカ東海岸からハンブルクに運んだミドリⅡヒシオズ製薬の強襲揚陸艦 アルデバランは、ヴェーザー河口沖の北海に臨戦態勢で待機している。

対BETA戦争のため独自の部隊を設立した国連軍、に見せかけている、通常時はもつと暖かい海にいる北大西洋艦隊 ヒアデスの旗艦だった。

これに乗って仕事場へ直行したことも何度かある、ラ・キンタにはなじみの船だ。乗り組んでいる二五〇〇人の“国連軍兵士”にはEU経済が崩壊するにつれてドイツ人も増え、そのアルデバランからTSF特別機をあつかえる操縦士が飛び立ったという通信を、シスターⅡステイージュは受けたのだった。

操縦士を乗せた高速ヘリコプター（縦につけたプロペラで上下に動き、横につけたプロペラで前に動くという、すばらしく斬新な発想のヘリコプターだ）AHワマンチは、アルデバランからベルリンまでの二四〇マイルを一時間で飛べる。

ラ・キンタは腕と壁の時計で、時刻を確認した。

一時間と少しでベルリン・タイムゾーンの三月二七日が終わる。

「そいつが動けば、今の政権がどうなってもベルリンは防衛できるんだな？」

「できます」

ラ・キンタの念押しに、シスターⅡステイージュは半月前に質問したときと同様に即答した。

「ベルリンを指向しているBETA群は、残り一四になりました。規模は三〇〇〇から六〇〇〇……大きなもので一万です。搭載されているTASシステムは、通常の人間ではあつかえないという欠陥はあ

りますが、動かさせさえすれば七万前後のBETAなら問題なく制圧できます」

「そいつは頼もしい。さすがは、……本社が作ったイメージング・ウェポンだ」

「エキゾテック・ウェポンです」

通信室のディスプレイ群と、窓外の格納庫を一望できる司令台に登ってシスター・ステイージュは訂正した。

この『合成食料を安全に輸送する業務のための』通信室には、数個大隊を指揮するに十分な設備がそろっている。一〇〇時間を越えてBETAが攻め寄せつづけている現在は、昼夜に関わらず一〇人ばかりは常駐して通信・監視をおこなっていた。

西ドイツ軍は『正常に』ここへ情報を送っているが、東ドイツ人民軍と武装警察軍の情報は入ってきていない。ミドリヒシオズ製薬に対する東ドイツの明確な反逆は、数十日前からだという。

ユーラシア諸国の紙幣や債券は紙切れと化しつつあり、合成食料に対するそれらでの支払いをミドリヒシオズ製薬は受けつけていない。

一九七四年以後、彼らに平伏し主権を切り売りすることに同意した国々だけが食料の需要を満たし、秩序と体制を維持できているのだった。

どこかから湧き出しているように見える国連軍の正体は、ミドリヒシオズ製薬が合成食料の代価として諸国から徴収した兵士と兵器だ。国連へ身を寄せた諸亡国の兵士には太っ腹なアメリカや日本が最新鋭の軍備を与えている、と大衆は信じこまされているが、それは真実ではない。

高価な兵器と設備を、所詮は他国の援助を頼みとして存続している喰いつめ寄り合い集団にすぎない国連軍に、大きな裁量権つきで委託してやるなどというバカげた予算案は、議会を通らない。

本当の国連軍独自部隊とは、安く雇用でき、後腐れなく死ぬまで戦場に置いておける、貧弱な個人用武器しか持たされていない難民兵だけだ。油田などの重要地を一時的に維持するためだけに投入され、帰

還は期待されない使い捨て部隊だった。

「予備策として」司令台の戦域ディスプレイを見せて、シスターIIステイージュは言った。「もう少しゼーロウ要塞へBETA群を密集させれば、この基地にある分の核ミサイルをウエスト軍が撃つだけでも、確実な対処が可能でしょう」

「この参謀連中と同じ御意見か」

「はい。五マイル圏内に集められれば四〇〇キロトンの使用で一掃攻撃が可能です」

ラ・キンタは首肯した。

「了解だ、シスター。サイコファットのほうはまかせとけ」

「ボス。攻撃隊が降りちまつてるぞ」

「なんだって?」

「西方総軍のTSF攻撃隊が、街に降りた。市街戦をやる感じだ」

壁の大型ディスプレイをチョッパーが手で示し、無人偵察機が空撮する東ベルリンの映像を再生表示させた。

「奇襲には成功してると思うんだがな。歩兵と連携して、もう一押しってか」

「ミサイルは?」

「もうミッテのほうへ撃った後だったよ」

遠隔操縦席で無人偵察機を飛ばしている女が、ディスプレイを見つめたままドイツ語で短く喋った。

隣に立って彼女と話していたチョッパーが眉をしかめながら通訳した。

「えーつとだな……、一五分前にTSF攻撃隊が搭載しているミサイルを、マルクスIIエンゲルス広場に一斉射撃した。これは、飛んできすぐのことみたいだ」

空撮映像では、東ベルリン・テレビ塔を中心として、多数の場所から黒煙があがっている。逆にビルディングから撃ち返している銃火は、この事務所通信室が事前に把握していた布陣より少ない。西方総軍の先制攻撃は成功したと評価してよい光景だった。

「それより早く、少なくとも二〇分前から歩兵? ……レジスタンス

がパンツァーファウストをイースト・ベルリン市街でブツパしてららしい。機銃陣地は、レジスタンスに南側から半包围を受けている」

「TSFが一撃離脱しない？ このまま勝負をつけるつもりか」

TSFにとつて不安定な肩につけた重い攻撃ミサイルは温存しておく火器ではない。対人戦闘で機銃陣地へ侵攻せねばならないのであれば、四〜五マイルは距離を保って、できるだけ急いでそれを撃ち逃げ、というのが教科書的な戦いかただ。

市街地へ降りて歩行状態になったとき、TSFは歩兵より弱い存在に変わる。空襲に成功したTSFが積極的にそうしているなら、支援してくれる味方の歩兵が十分に強力だということだった。ハーフェル川方面でもおこなわれている戦闘でどちらが優勢なのかはまだ未確定ながら、もう一押しでシュタージ本部を破壊できそうだと思えば、このまま東ベルリンで攻勢継続を選ぶだろう。

シュタージ政権は危機的状況にある。武装警察軍の大多数を人民軍の背後につけておくしかない今となつては、シュタージ本部は一蹴りすれば倒れる。このことに幻惑された東ドイツ人のほとんどは気づいていないようだが、西方総軍にはわかつているのだ。

「サイゴン陥落みたいなの？ ベトコン戦力が当てになるんだろうね」

「サイゴンはこんなひどくなかったぜ……どうする？ シスター。まだ、しばらくは戦闘状態が収まらないよ」

ラ・キンタは戦域ディスプレイのハーフェル川を指でなぞつた。

「武装警察軍はベルリンに留めておける機動戦力が、底をついたようだ。あるだけ全部をハーフェル川の西方総軍へ向けているんだろう。……突入したTSFとレジスタンスの動きからして、ベルリンを今、守っているのは歩兵だけだ……と、思う。あとは、せいぜい装甲車くらいだな」

「確認できた西方総軍とレジスタンス——彼らが自称する革命軍の戦力で、シュタージ本部を攻め落とすことはできません」

「レジスタンスも目眩ましの陽動しかできないわけじゃないさそうだけ？ 軍からRPGも提供されてるみたいだ」

「シュミットは、無敵なのです。このベルリンにおいてへ夢見るアン

デイヴを支配できている限りは」

シスターIIステイージュは別の小型ディスプレイにシユタージ本部を映した。

数カ所の屋上と車輛から隠し撮りされているらしい構図の庁舎は、煙る東ベルリン市街を背景に無傷だった。

「先ほどの一斉射撃でシユミットを殺せていなければ、ベルリンへの攻撃は失敗に終わるでしょう。ESP波の精密な照準投射ができる範囲に敵が入れば、ヘアンデイヴは人間の意識を一まとめに破壊することができません。人格の書き換えすら、多少の時間をかければ可能なです」

「プロジェクションによる絶対防御というやつか……どうにもへ夢見るアンデイヴってのは、戦力としての勘定が難しいね。国民を従順な家畜にするESPも、レジスタンスには利いてないんじゃないか？」  
「ブランデンブルク広域へ恒常的に放っているプロジェクションは、微弱なものです。強い敵意は消せないでしょう。レジスタンスを鎮静できる強度で無差別放射すれば、味方の部隊も無力化してしまます」

「なるほど。ベルリンの親衛隊にも、ESP防護装備は支給されてないと考えてよさそうだな」

「そうですね。シユミットは人間を信用していませんから」

シスターIIステイージュの言葉に、ラ・キンタは苦笑した。エーリヒへの評価にではなく、人間を卑しい家畜とみなしているミドリヒシオズ製薬の大幹部がそう言ったことになだ。

この九年、当然ながらミドリヒシオズ製薬から合成食料生産施設・技術を奪おうとした者は多い。そのことごとくは、地球のいたるところで、彼らの隔絶した先進技術によって叩きのめされてきた。

彼らの先棒をかついでいるラ・キンタが言えた筋合いではないにせよ、飢えたる子羊に対して人類牧場の支配者たちがおこなってきた騾は残酷なもので、決して慈悲に基づいても信用に基づいてもいはしなかった。

「それで、全員に集合はかけたが、どうすんだ？」



司令台の下まで寄ったチョッパーに問いかけられ、ラ・キンタは格納庫を見た。

ラ・キンタとチョッパーに何分か遅れて入ってきた本社の整備班が、TSF特別機の点検にかかっている。

「出撃準備だ。攻撃側は一時間もたてば息切れする。〈最高指令室〉が気をとられてくれれば、隙を突けるかもしれない」

武器、弾薬、充電池、飛行燃料の搭載を終えた最後の六機が格納庫から出てくると、ラ・キンタもへ夢見るアンディへ専用輸送車の通信席を立った。

輸送車の横には、先に準備が完了した二四機のMBAが搭乗部に覆いをかけられて並ぶ。三〇〇フィート四方の格納庫も今はこつたがえしており、作業が済んだものから外へ出さねばならなかった。

「輸送車は？」

指揮官機を歩かせてくるチョッパーが、駐機場へ降りたラ・キンタに尋ねた。

「格納庫のF-15で運ぶ。シエルター前に空輸だ。シスターが話をつけてくれた」

「そりや良かった、ベルリンの壁をブチ破らずに済む」

滑走路をまわる除雪車が温水を撒き散らしているせいで、輸送車もMBAも濡れている。

ラ・キンタは顔に当たる汚染された水滴を手で払い、気密ヘルメットをかぶった。雪に混ざる劣化ウラン粉塵は、体に悪い。

「こつちは良くない知らせだ。北の西方総軍は、ベルリンまで来られないみたいだぜ。未確認情報だが、オラニエンブルクの拠点も爆撃し返されたそうだ」

「やれやれ、だらしねえな」

「武装警察軍の伏兵が地下の秘密基地からあらわれたとかいう情報も、人民軍TSFノード発で入ってる」

「秘密基地つてのは、ベルリンのシエルター複合体か？」

「詳細は不明だ。どこに出たのか位置はわかってない」

三〇分ばかり前、NATOはもはや東ドイツの意向にはかまわず、西ベルリン基地に全力出撃の準備を指令した。

BETA群内部へ一〇〇二〇発の核爆弾を送りこむために、西ドイツ軍は基地の航空戦力を最大まで使うのだろう。燃料をケチってか

普段は雪置場状態だった駐機場にも、大急ぎで湯を浴びせていた。

遠方からミサイルを発射して、あとはハイテクなマシンにおまかせではBETA群の頭上で核爆発をおこすことはできない。光線属種の迎撃は、鈍重な人類軍より段違いに速く正確だからだ。

今回のように済し崩しの投射をする場合、核ミサイル発射より起爆まで、BETA群に別方向から牽制弾を間断なく撃ちつづけることが望ましいとされる。

オーデル要塞群に大砲を撃つ力が残っていればよいが、残っていないければそれも西ドイツ軍が出さねばならないということになる。

「シエルター複合体から出てきたなら、それはへ最高指令室を守る親衛隊のはずだ。武装警察軍は最後の隠し部隊を吐き出したと思ってよからう」

「要塞もそろそろ限界って悲鳴をあげてるみたいなんだが……空輸脱出できる選択肢を捨てたことは奇妙じゃないか？　なんでそこまでベルリンにこだわる」

「まあシュミットも、そうホイホイ逃げ出すことはできんのだろうよ。なにしろあいつは、無敵の総帥らしいからな」

「奴はこの基地に核ミサイルがあることを確信してるのか……？　要塞と政権がもってるあいだにNATOが核を撃てば、粘り勝ちってことになんのかな」

「それは無理だな。西側が加勢しようがすまいが、シュタージ政権は終わりだ。要塞は、おれたちがへアンディを奪ってくるまでもてばいい」

駐機場へ出てきたシスターIIステイージュを認めて、ラ・キンタは空を見あげた。

「御到着かね？」

「一〇マイル」

チョッパーが西の空低くをMBAで指し示した。MBAの望遠力メラは一〇マイル離れた大型兵器を、コンピューターと連動して機種識別できる。ラ・キンタはヘルメットのバイザーにチョッパー機のカメラ映像をつないだ。

東ドイツ軍はBETA群の生体レーザー砲を、まだ撃滅できていない。

晴れた夜空を、東から何本も、人間の肉眼では見えないガンマ線レーザーが走査していた。

数は減っている。オーデル戦線、つまりBETA群にとっての前方へ向けられている走査用レーザーは、北と南に遠いものを合わせても数十本のようだった。

ただし悠然と空をなめるレーザーの動きは、負けているBETAのそれではない。撃ち落とすべき飛翔物がなくなつて退屈しているとでも言いたげな、それとも人間同士で潰しあうベルリンとオラニエンブルクをいぶかしげに探つてでもいるかのような動きだった。

「ボス、抱えて飛んでくれる相手だ。敬礼でもしとけよ」

「ヌキテ・ハンドをケツに突うずるっ込んでやるのは、相手のツラを見てからって決めてるんで」

「病的な性向がとてモキモイです」

鬱陶しく山盛りの雪を攻撃していた除雪車が退避すると、ワマンチは水飛沫を吹きあげて駐機場へ着陸した。

ラ・キンタはバイザーにかかる水滴を袖でぬぐった。

西ドイツの燃料節約は、しかたがないことではある。地球の平均気温は一五？も低下し、高緯度地帯では燃料の年間消費量が三倍になっていた。しかも原油価格は、イスラエルがエジプトを滅ぼした第五次中東戦争の動乱も一因となり、一九七三年以前の一〇〇倍を超えてしまっている。

一九七四年、最終中東戦争とも呼ばれるユダヤ人とアラブ人の戦いが地中海東岸でおこなわれた。地球を覆った黒い雲の下で、狂気に駆られた現代人が古代メソポタミアさながらの殺戮をやつてのけた、凄惨な戦いだった。

エジプト・シリア・イラク（クウェートを巻きこんで油田を争奪する内乱がおきていた）・ヨルダン連合は（核の冬）による破産と飢饉に追いつめられ、この年の一月にイスラエルを再攻撃する。スエズの支配を完全なものとし、航送される合成食料の権益に力づくでも喰

いこむためだ。

しかしスエズにおける前年の勝利は、イスラエルの圧倒的に優勢な空軍力が火を噴いて、くつがえされてしまう。アラブ連合軍は壊滅し、ナイル三角洲にあったエジプト政府も消し去られた。

一九七五年始、イギリス・フランスは平和維持軍なるものをおつての植民地へ派遣して、イスラエルと共同でナイル川をアスワンまで征服した。イスラエル空軍によって、イギリス製またはフランス製の核爆弾がカイロやアレクサンドリアに投下されたという噂もある。

原油価格と合成食料価格の吊りあげ合戦が本当の戦争になってしまった危機の元凶が、自制心に乏しい砂漠の蛮族にあったのか、ソビエトとアメリカの苦境に狂喜したヨーロッパの陰謀集団にあったのかは定かでない。

ただ、アサバスカ決戦後におきた大混乱の中で『先制攻撃されたから対処しただけ』にしてはユダヤ連合のエジプト征服は手際が良すぎた、と無視できない数の陰謀論者が主張する。どうであれ、ソビエト難民、カナダ難民ほど一般に知られてはいないが、このときからエジプト人も〈核の冬〉の底知れぬ暗黒へ蒸発しつづけていた。

そしてヨーロッパ、アラブ諸国を巻きこんだ第五次中東戦争は、資本主義陣営の石油市場をも連鎖的に蒸発させてしまった。

アラブ諸国を「国連軍」がなかば制圧下においた今も、その場しのぎの協力と分裂をくりかえすEUには不公平な石油分配という争いの根が絡みつく。

ラ・キンタに勝ち組の仕事にくれたミドリヒシオズ製薬の警備局マネージャーによれば(あのCIA崩れも今では本社の役員だ)、アサバスカ決戦がおこなわれたまさにその日に、人類の支配者はニューワールドオーダーを諸政府の主だった者どもに告示した。それは、BETAとの戦争を妨げる『存在に値しない国家』からは主権も自治権も没収し管理下におく、といった極めて挑発的なものだったらしい。

アメリカ、ソビエト、中国は不承不承の同意を示し、敏速に対応したイギリスとフランスは帝国主義をよみがえらせる機会を得て、応じ遅れた西ドイツはEUから抜けられないまま分配される資源の不足

に苦しんでいるのだった。

「ホーリー、ファック！」

ワマンチの後部銃座室にカメラを向けたチョッパーがうなった。  
小翼脇の扉を開けて、女が滑走路に降り立つ。

「エメラルドグリーン……！ ジャパニーズ・アボミネーションだぜ  
！」

その女は、左手にたずさえた日本刀を見るまでもなく、あからさまに日本人だった。

哺乳類のものとはまったく異なる、繊維質の宝石のごときエメラルドグリーンの髪が、黒革のクロークを撫でて風に舞っている。

「どうも、シスターⅡステイージュさん。お待たせしました、ゲッツェ・マンニョです」

濡れた駐機場に膝をつける恭しいカーテシーで迎えたシスターⅡステイージュに、異次元の色彩に汚染された髪を整えて女は頬笑んだ。

「〈協会〉から話は聞いています。事態を収拾に来ました」

「革命軍はベルリン進撃に失敗しました。残存する機動戦力はブランデンプルクから退却しつつあります」

ゲッツェ・マンニョを格納庫へ先導しながら、シスター・ステイ・ジユは最新の情勢を伝えた。

「どちらもかなり損耗しているようですが、革命軍は武装警察軍との戦力差を解決できていません」

かつて日本に本社があったミドリ・ヒシオズ製薬がトラブルシューターに日本人を送りこんできたことは、意外ではなかった。その日本人が希少種のアボミネーションだったことも、さほど驚きではない。

第二次世界大戦前、ミドリ・ヒシオズ製薬は東アジアの日本植民地でアヘン市場を制した財閥だった。

当時の東アジアで一番に儲かる仕事は、アヘンの販売だ。軍政日本の国家予算は少なくとも一割がアヘン市場から吸い取ったものだったと推計されている。

第二次世界大戦に敗れるまで日本を独裁支配した武家階級は、当然ながら、アヘンの専売をまかせたミドリ・ヒシオズ製薬に多くのサムライを派遣していた。その中には、古より日本の権力構造の奥深くに棲むアボミネーションもいたという（ジャパニーズ・アボミネーションはアメリカ人がつけた蔑称であり、ホモ・サピエンスのような学名とは違う）。

ミドリ・ヒシオズ製薬は大戦後、麻薬と人体実験の技術を持ってアメリカに本拠を移した。

武家階級はアメリカ軍と民主化運動によってバラバラに解体され、日本国内では権力を失った。しかし彼らは、大戦直後はその余熱でまだ『熱い戦争』だった冷戦を巧みに利用し、国家主権の空白が残った旧植民地には大きな資金源を保持したのである。

「オラニエンブルクからの第二波はないということですか？」

「はい。ベルリンとの戦力差が革命軍にわかっているなら、オラニエンブルクから単独での再進攻はないでしょう」

「イースト・ベルリンの戦力は？」

「機銃陣地は、初手の奇襲で壊滅状態です。しかし歩兵一個連隊に大きな損害はありません。レジスタンスは掃討されつつあると思われるます」

燃料臭が残る格納庫を進みながら、シスターIIステイージュは壁時計を見た。

「三五分前に警察軍のミグ23が四機、ミツテ区へ妨害なく着陸しています。郊外へ飛び去った損傷機にも、市街からの攻撃は確認できませんでした」

「もうしばらくは籠城できるようですね……しかしレジスタンスは、なぜいきなりTSFで突入を？ 爆撃には不利でしょう」

「そのことですが……」

シスターIIステイージュの足が止まった。

「モリヤが部隊の運用に干渉した可能性があります。奇襲に先んじて、彼女は革命軍の一隊を連れイースト・ベルリンに潜入しました。TSFによる派手な攻撃は、シユミツトの親衛隊を〈最高指令室〉から引きずり出す陽動だったのかもしれない」

「ほう、モリヤさんが張りきって〈最高指令室〉に向かっているのですか？」

「いえ、モリヤは聖ウルスラ作戦の予定どおりに放送局を制圧することです。〈アンデイ〉の処置は〈協会〉にまかせるのみとも言っておりましたが」

「超<sup>ユーパーメンシュ</sup>人への秘術を譲り渡すと？ 彼らが」

「西側の我々はヨーロッパの現状を理解できているし、ニューワールドオーダーの新たな段階を承認するであろう、とも」

「モリヤさんまで暴走しているわけではないのですね？」

「モリヤによれば、アーネンエルベの総意だそうです。……東側はシユタージが暴走を始めたときには、既に解散状態でした」



シスターIIステイージュはF-15を見あげた。

それはプロツケンの巨人めいた、大いなる〈宇宙旅行協会〉が人類世界を支配している証拠の一つだった。

「BETAに対処せねばならないという現実を、彼らも受け入れたのでしょうか。超人への夢は破れたのです」

「そうですか……。アーネンエルベも〈協会〉への服属を選びましたか」

シスターIIステイージュの横に立ち、マンニヨもF-15を見あげた。

「自らの欲望を優先し、人類の進歩をさまたげたアーネンエルベは、償いをしなければなりません」

「ヘグローサー・ブルーダー」の再生産によって？」

「ツオーネにおける一定の成功は高く評価されています」

「横浜でも、そんなことを言っていましたね……。篡奪党も認めるのですか？」

「はい。二二世紀を迎えるために、ツオーネの拡大再生産は必要であるとエグゼクティブカウンシルは決議しました」

「なるほど、コセさんが慌てているわけです」

ラ・キンタが首に装着しているマイクロフォンは高性能で、一五フィート離れていても騒々しい格納庫内で二人の声を良く拾えた。

どうにも聞き耳を立ててしまう会話だった。

コセサンとは、ミドリIIヒシオズ製薬の重役、タマップチ・コセのことだと思われる。人口が大きく変動しつづけるヨーロッパでの食料配給を、八年前から担当している専務だ。ヨーロッパでBETAとの戦争を頑張る数億人の腹加減を統治している人物といってもよい。

陰謀論者には三百人委員会といったような名称でわずかにその存在を嗅ぎつけられている、コセに比肩する重要人物たちで構成されているエグゼクティブカウンシルは、アメリカ合衆国ならば連邦議会に相当する〈宇宙旅行協会〉の最高会議だった。現在の最大勢力であるミドリIIヒシオズ製薬は与党に当たる。

彼らエグゼクティブが運用をまかされている大小さまざまな組織

は、意図的に横の連携を制限されており、下っ端の人間が恐るべき秘密結社の全体を窺い知れない構造になっていた。

ヒアデス艦隊の水夫や、合成食料コンテナーの輸送を請け負う武装配達人や、携帯突撃砲の最終調整に余念がないF―15の整備員や、チョコッパ―は知らないことだが、これらの雇用人は〈宇宙旅行協会〉の末端に組みこまれて世界秩序の維持存続に従事しているのだった。

巨大な不定形な秘密の組織集団である〈宇宙旅行協会〉は、何千もの企業や私設軍隊を、このエグゼクティブカウンシルを中枢として一つにまとめている。

つまりエグゼクティブカウンシルとは、ほぼ陰謀論者が信じているとおりの、世界を支配する闇の貴族の集会だ（大規模な私設軍隊を復興させた武家階級にも担当のエグゼクティブがいるはずで、そいつはおそらくミドリ―ヒシオズ製薬党の一席を占めている）。

彼らに逆らえる政府は存在しない。彼らが「無駄に多すぎるから中国人とインド人を半分以下に間引け」と指令すれば、それは実行される。

政治家より頭が悪い軍人はしばしば逆らうが、結果は間もなくシュタージ政権が迎えるものと同じだった。

ただし、エグゼクティブカウンシルは〈宇宙旅行協会〉の最高意思決定機関ではない。ラ・キンタが実感をもって知っているのはこのブルジョワ貴族会議までだったが、その上がある。

「しかし、これから二〇年」

近づいた整備員からF―15用のヘッドセットを受けとって、マンニョがシスター―ステイ―ジユに問うた。

「拡大する西洋戦域を持久させることは、アーネンエルベの能力を超えているのでは？」

「彼らには全力で働いてもらいます」整備員が離れるまで待ち、それがなにを意味するか知る者を心騒がせる言葉をシスター―ステイ―ジユは発した。「インナードメインに、しかるべき地位も用意しました」

「ふむ……、シユミットさんは？」

「シユミットは〈協会〉に反逆してきました。見せしめも必要かと」  
「確かに、また手に負えぬペットを育成されても困りますしね」  
「旧大陸でおこなわせる今後の持久戦に〈グロウサー・ブルーダー〉が  
どれほど役立つかは、第三世界での運用経過を見てからの評価になる  
でしょう」

「〈グロウサー・ブルーダー〉は能力を制限された形態にすぎませんが、  
長く使われてきた実績のある道具ですよ。一〇〇〇年前のヨーロッパ  
でも、二〇〇〇年前のオリエントでも、サピエンスの家畜化に役  
立ってきました。奴隷と戦争が、忠誠と勇壮が滔るとき、あれは最も  
性能を発揮するのです」

マンニヨはクロークを脱ぎ、下に着こんでいたTSFパイロット強  
化スーツにヘッドセットを接続した。クロークとそろいのワンピー  
スドレス、トラ・キンタが思っていたものは、背側はベルトを巻いた  
だけの黒革のエプロンだった。

「インナードメインは人類と〈グロウサー・ブルーダー〉の融合を試み  
ないのですか？」

「ニューワールドオーダーは西側で十分に機能しています。……人類  
に、〈夢見るアンデイ〉などという怪物は早すぎたのです。『新人類』  
ですら飼い主を気づったポリシエビキにESPの手綱をかけました」  
マンニヨのエプロンを脱がせながら、シスターⅡステイージュはつ  
づけた。

「東側に残るはシユミットだけ——シユミットを肅清し、〈アンデイ〉  
を回収すれば、ユーバーメンシユのバカげた実験も終わりです」

「ホッホッホッ……『新人類』も負けがこんでいますから、ヨーロッ  
パからは手を引くでしょう。そして」

聖母のごとき慈愛の微笑を浮かべたまま、マンニヨは言った。

「アーネンエルベは〈グロウサー・ブルーダー〉とヨーロッパとアフリ  
カを捧げ、しばしの猶予を〈協会〉に乞う……上出来ですね。よくま  
とめたものです。世界は因果の揺らぎを減少させ、約束した未来へ、  
さらに安定して進行すると評価してよいでしょう」

「ありがとうございます、レディー＝マンニヨ」

「難民となることすら許さぬ、最後の一人まで戦って死なねばならぬ『完全なる社会』を、旧大陸に作らせる。……悲願が叶いますね、シスター||ステイ||ジュさん」

シスター||ステイ||ジュも静かに笑った。

「ありがとうございます、レディー||マン||ニョ」

轟くF-15の飛行音にまぎれて車道を突き進んだ一五機のMB  
Aが、東ベルリン・核シエルター地上施設を急襲する。

西ベルリン基地のミドリヒシオズ製薬事務所が小型無人機によ  
り確認した、地上施設を守る装甲車<sup>BRDM</sup>は六輛。

玄関側に二、東西断絶により廃線となった裏側の鉄道上に四。空を  
広く見通せる線路の四輛は、ソビエト開発の四連ロケットランチャー  
ガスキンをつけた対空仕様だった（ラ・キンタの記憶では、東ドイ  
ツに車載のガスキンはなかった。ポーランド軍からでもかつぱらつ  
たものだろうか？）。

ウィツカー隊の奇襲により、へ夢見るアンデイ専用輸送車の通信席  
ディスプレイに映されたそれらが次々に燃えあがる。BRDMの搭  
乗員はF-15に気をとられ、小さな道路へは注意が不十分だった。

燃料缶の焚き火に集まっていたシュタージ武装警察軍の外套を着  
た歩兵は、七〇ミリHEDP誘導ロケットにつつき七。六二ミリNA  
TO弾を浴びせられて、線路や地下鉄の廃車に倒れた。

同時にチョッパー隊が、散開した市街地のビルディング屋上から、  
地上施設の窓という窓へ五〇キャリバーを撃ちこむ。

粉塵に包まれる地上施設からの反撃は、見当外れの近すぎる建物を  
撃ち、二〇秒たらずで止まった。

本社の最新兵器は、圧倒的な性能だ。冷戦期の装備しかない田舎軍  
隊では勝負にならなかった。

「カーネル、撃ちすぎじゃないか？」

「これで普通だ」

隣席からディスプレイを見る “運び屋ムスターマン”の問いかけ  
に、ラ・キンタは大声で答えた。対NBC仕様の輸送車内にも一〇万

馬力のジェットエンジン音は響いている。

F-15は輸送車を乗せた車台を両手で抱えて、高度二〇〇フィートを一〇〇ノットで飛んでいた。

「いや、捕虜は？ 皆殺しにしそうだ」

ムスターマンがドイツ人の訛りはあるが流暢な英語で言った。

「地上にいるのは緊急配置された護衛だろ。皆殺しでいい」

西ベルリン事務所が案内人として雇ったエージェントに、ラ・キンタは短く説明した。

「シエルターや〈指令室〉の常勤は、地下にもいるはずだ」

かれこれ二五年も東西間の非合法物資を運ぶ稼業をしているという冷戦期の老人は、〈宇宙旅行協会〉や〈夢見るアンデイ〉のことはなにも知らないようだった。数週間前にBND経由でミドリヒシオズ製薬からの仕事を引き受け、〈最高指令室〉の存在と位置を教えられただけだという。

この西ドイツ人は〈最高指令室〉を、武力で統一党と人民軍を押さえた僭主 エーリヒ・シュミットが用心深く拵えておいた、ちよつとした監禁設備もある秘密指揮所のごときものと考えているらしかった。

「まあ、それならいいんだがね——うおっ！（註 ドイツ語ではない）」  
急上昇と直後の浮遊感に、体を傾けていたムスターマンが肘掛から手を滑らせた。

チョップパー隊の射撃が終わり、市街地上空を不規則旋回していたF-15が地上施設の線路側に着陸する。上昇で前進を止め、そのまま一〇〇トンを大きく超える機体を数百フィートのわずかな制動距離で着陸させる、高い技術を駆使したおそろしく荒っぽい操縦だった。

排気噴流で武装警察軍の兵士や燃料缶が吹き飛ぶ。

地上施設の横に停められていたトラックも垂直着陸による噴流の直撃で飛び、鉄道の区切りフェンスを破壊して車道に転がった。

「無事か？ ヘルムスターマン」

「操縦が、乱暴すぎる」

「撃たれる危険があるからな」

戦域ディスプレイに表示される地上施設の周辺から、敵の戦力記号は消えている。

こちらへ近づく敵の記号もない。今も東ベルリンの各所でレジスタンスとの市街戦はつづいており、武装警察軍にここへ増援をよこす余裕はないのだった。

しかし、この輸送車やF-15、三〇機のMBAが発信する情報を即座に処理し戦域データとして返信している西ベルリン基地事務所のメインフレームは極めて高性能だが、それでもベルリン市街上に表示されている敵は無人数が見つけたものだけで、屋内の歩兵までは捕捉しきれないのだ。

「モンスターロボットで戦場を飛ぶなんてのは、年寄りにはきつい仕事だ」

「まだつかまっていたほうがいい」

戦域ディスプレイの縮尺を一／一万から一／四〇万に換えると、既にゼーロウ要塞はBETA群hとの隣接状態に陥っていた。

「レーザーも高度を下けている」

人類軍が通常弾頭の砲撃でBETA群に勝つには、二マイルの間合いを維持する必要がある。

防衛線が一部でも間合いの有利を失えば、BETA側の全体的な突破も時間の問題だった。夜明けまでには、防衛陣地は広範囲にわたって壊滅するだろう。

「NATO軍は、なにをグズグズしてるんだ……。なぜ、テーゲル基地を出られない？」

「先のことを考えてるんだろうよ」

F-15がジェットエンジンの飛行燃料を止め、車輻を打ち鳴らす砂利飛沫がやむと、ウィツカー隊も鉄道車輻所へ進入し、地上施設の線路引きこみ口を掃討した。

施設の屋内に倒れている、死にかけているか死んだふりをしている人間にとどめを刺す。もがく元気がある生き残りの腹や脚をMBAで踏みつぶし絶叫させても、施設二階と地下からの反撃はなかった。

「この状況でシュミットが小うるさい注文をつけられるとは思えない

が

「シュミットのことじゃない」

F-15はトラックをどけて空いた場所に、車台を降ろした。ぎこちないデッドリフトで輸送車を揺らされ、絡まったシートベルトを外しディスプレイに見入っていたムスターマンは、ふたたび体をぶつけた。

カタログにはパイロード部と書いてあった、出っぱった膝というか脛の伸長部が邪魔そうだ。その両膝の天面にも三文字のエンブレム、意匠化された『TAS』の社名が、封じの呪符めいて印刷されている。

「二階、クリアー」

「よし。Uバーンを見てくれ」

「了解」

東ベルリン・核シエルターは冷戦期には地下鉄の廃線駅を再利用した、非公開ではあったにせよ一般市民のための非軍事施設だった。

軍事基地機能の追加は、三八万の駐留ソビエト軍が東ドイツから撤収し、その数十倍にも達したといわれるソビエト難民が東ヨーロッパへ押しかけていた一九七〇年代なかば、秘密裡におこなわれた。

軍事基地化を主導していたのは、武装警察軍を設立させて間もないエーリヒだ。難民問題の最終解決を断行し、統一党政権で押すに押されぬ地位を確立した頃だと思われる。これは、BETAに蹴散らされている真つ最中のソビエトも、二〇〇〇万のカナダ難民で溢れかえったアメリカも諜知できなかった極秘工事だった。

「さて、わたしはオーデル戦線をトリミングせねばなりません」

通信席付属ディスプレイに専用回線で映る、F-15操縦席のマンニョが告げた。

「あとはまかせましたよ、カーネル」

「すばらしい操縦だったよ、マダム」

ラ・キンタはマンニョに敬礼した。魔性を孕む完璧な微笑でマンニョは応じ、ラ・キンタを惴慄させてディスプレイから消えた。

二機のウィツカー隊員が車台の固定器を外したことを伝え、手ぶりで輸送車の運転士に前進を指示する。



F-15はフェンスを蹴りのけて車道に出ると、ジェットエンジンを再起動させ東へ飛び去った。

「人は見かけによらない。ああいうのは車を走らせても狂暴化するんだぞ」

手をさすりながらムスターマンがぼやく。私服の袖口に血がにじんでいた。

「あ……？ ああ……。シュミットも、スピードフリークだったか？ オートバーンを一五〇ノットでカット飛ばすとかいう」

「それはゾビエトのラリつてた書記長だ——そう、シュミットだ。あいつがテゲル部隊を止めてるんじゃないのか？」

「いや、NATO軍は……。自分から出撃を見計らってるはずだ。そのほうが節約できる」

「節約？」

「核の使用量を節約できる。防衛線に程良くBETAが密集したほうがな」

「防衛線の、兵士はどうなる？ もろともに焼くつてののか」

ラ・キンタは肩を竦めた。

「要塞の奥にいる連中は助かるんじゃないか？ まあ、今年はヨーロッパの当たり年だ。しかたあるまい」

「当たり年か……。去年から攻めてくる大群は『開拓団』と判定されたらしいが」

ムスターマンは顔の皺を深めて戦域ディスプレイを見つめた。

「ベルリンは終わりか。……。今回の仕事、危険を感じていたんだ。いやな予感が当たった」

「情報どおりなら、ここからは地下道を走って、ヘアンディンを救出して、郊外へ抜けるだけだ。数時間で終わるし、三〇キロトン弾ならベルリンまで影響はない」

ムスターマンは「ベルリンが終わりつてのは……」と言いかけて、声を溜め息に変えて座席に身を沈めた。

「線路の片側が自動車用に改造されているとは、確かな情報なのか？」

「ヘフライング・バーナード」情報では、確かだ」

「シスターもそう言ってたよ……へフリーゲンデ・ベルンハルト」か  
シスターIIステイージュとはドイツ語で話したであろうムスター  
マンは、確認するようにつぶやいた。

「ここまでは、じつに正確だったぜ？」

「そうだな。有能なんだろうが……そいつもへアンデイ」もへ最高指令  
室」も、初めて聞く名だ」

「だろうね」

「あんたは？」

「へバーナード」のことか？ 七五年頃からシユタージに張りついでる  
監視班だとは聞いた」

【私とベアトと】夢のベアリン王国 1【ワンルーム】

一〇分前から飛行燃料切れ警報を発しているアリゲートルを、ベアトリクスはアレクサンダー広場に設けられた補給所へ強引に着陸させた。

アリゲートルの飛行推進機はバラライカより二五%高速で飛ぶために、二倍の燃料を消費する。ベルリンへ進路を変えたときには、燃料はつきる寸前になっていた。

共和国宮殿、かつては聖堂だった原爆ドーム、再建されたフンボルト大学、回転するアスパラガスことベルリン・フェルンゼートウム、ブランデンブルク門などが集まるミツテは、反乱軍の容赦ない攻撃により、まだ黒煙を噴いている。

広場の補給部隊員に機体をまかせ、ヴェアヴォルフ大隊司令部に着陸位置を伝えたベアトリクスは、物資や負傷者を運ぶ車輛をさげ、休憩所が無事に残っていると言われた共和国宮殿へ歩いた。

大隊の幕僚は後方要員としては有能だ。実質的には大隊戦闘団の指揮官をやっているだけのベアトリクスがいなくとも支障はない。それに、どうせ次の出撃はないだろう。ヴェアヴォルフ大隊戦闘団は壊滅した。

地上の混乱ぶりは、負け戦を予感させる光景だった。反乱軍は正確な情報を得て、武装警察軍の燃料倉庫や機銃座を狙い撃ちに行っているように見えた。

エーリヒ・シュミットのような例外を除いて、冷戦世代はBETAとの戦争では大して役に立たない。安全な時代に無駄に出世しただけの軍隊屋だった。

しかし連中は、人間社会内での小細工には長けている。人民軍の少なからぬ部分が、いまだに反動的冷戦世代の、害悪でしかない影響下にあった。

統一党につづけて国家保安省ベルリン派も血祭りにあげたが、まだ

足りない。日和見主義の内通者どもが反乱軍へ情報を流している。

知恵者のヴェアヴォルフ大隊副長は今頃、統制居留区の「加工処理に配属」される難民のような気分で逃げこむ先を探しているところだろうか？ 彼は冷戦世代で、長く人民軍に勤めていた。

戦闘に使えなくなった部隊の後方要員からは情報を吐き出させることができる。

これまでに彼らを吐かせてわかったことは、冷戦世代には絡まりあつた根のように錯綜して強固な人脈があるという患禍だった。

人民軍も、武装警察軍も、ゲシユタポのくたばり損ないにより創設された国家保安省の古い部分である秘密警察も、ドイツ連邦やNATOの腐敗した特権階級も、地球戦争以前の支配体制を維持するためにどこかしらでつるんでいるのだ。

フランツ・ハイムもそうだ。

戦闘指揮官としてはカカシみたいな無能ぶりをさらしたが、彼の取り柄は良識ある穏健派として築いた人脈にあつたのだ。

連合軍占領地域ヴェストベルリンはあきらかに意図的に、反乱軍部隊の領空通過を許した。NATO軍にまでおよぶ驚くほどに広く深い人脈を、フランツは有していたということだった。

NATOを消極的にでも応急的にでも味方にできた効果は大きい。国連の代行として、バルト海から共和国に合成食料を運んでいるのはNATOなのである。NATOを敵にすれば、暫定政権はベルリンで孤立状態に陥ってしまう。

数個師団に相当する人民軍部隊が各地で蜂起し、武装警察軍の大部分は釘付けにされていた。この睨みあい冷戦世代による、ある種の演出にすぎなくなっているのであれば、援軍は来ないだろう。

統制がとれない反乱軍など蜂起する端から各個撃破できる。そう言った武装警察軍本部の参謀どもは、大口を叩いた責任を負うべきだった。

反乱軍の第二波攻撃は、ベルリンの防衛部隊を粉碎する。

人間相手の戦争でならば、冷戦世代に一日の長があることを認めざるをえなくなる。

問題は、それをできる戦力が反乱軍に残っているかだ。

心身の激しい疲労で、この問題を考える力はベアトリクスに残っていないかった。

「戦勝おめでとう、ベアト。反乱軍はかたづいたか？」

よろめきながら共和国宮殿内を進み、ヤケクソじみた勝ち鬨をあげる兵士たちの喧騒が遠ざかった上層階の廊下で一室の扉を開けると、悪夢が待っていた。

「おや？ お疲れのようだな」

憂わし気に女の姿をしたそれが言った。

ベアトリクスは無言でゾファに坐った。部屋の奥にいる存在は、幻覚だった。

「だがベアト、オーデル側も対処を急ぐ必要があるぞ。キユストリンで戦線が破れた」

照明がついていない暗い会議室で、金髪を照らす光を放つフェルンゼーアーを女は示した。

「二時間前から、五〇〇超のメデイウムが陣地を踏みつぶしている。BETA群hは小型種も機銃破碎線を突破、ゼーロウ要塞はライターレおよびエクヴスの侵徹を受けている」

いつもは過去の言葉を支離滅裂につぶやきつぶける幻覚は、不気味な明瞭さでフェルンゼーアーに映されている地図を指さしながら喋った。

「ノイハルデンベルクから輸送一号道、リーツェンまでは通信途絶、フランクフルトの師団もカハマルカ・アラルムを出した。戦線の広範囲が白兵戦状態に陥りつつある」

疲労感に圧倒され、ベアトリクスは重い上半身を支えていられなくなり、ゾファに横たわった。その胸は豊満であった。

部屋の奥に立つアイリスディーナ・ベルンハルトは、幻覚だった。

しかし幻覚が喋っていることは、根拠のない妄想ではないのだから。この数時間に、似たような通信を傍受した記憶がある。

これは幻覚に語らせるかたちで、酷使されたベアトリクスの脳が、得られた情報を考査しているのだ。そうであるはずだった。

「ウーゼドムの艦隊司令部によると、シュテティーン以南のBETA後段が進路をベルリン方向へ変えた。二〇〇〇超のグラヴィスが集結を始めている。応射している残余のルクスは一五〇〇だ」

第二次世界大戦後、ポーランド領となっていたシュテティーンの難民統制居留区を誘引材としてBETAの大群を集中させ、陸海軍の全力砲撃で撃滅するという武装警察軍本部の作戦は、半分しか達成できなかったらしい。

生きた都市はBETAを強く誘引する。ただしBETAを密集させた時点で、もろともに破壊せざるをえないため、これは捨て駒でもある。

シュテティーンを使ってしまえば、二〇〇キロメートルの戦線に展開した共和国軍に二〇〇〇のグラヴィスと、一五〇〇のルクス、さらに三万と推測されるバルルス・ナリスを止める力はない。

「……BETA一個旅団ならミュンヒェベルクの戦力で対処できる」「ミュンヒェベルクには輸送隊と、武装警察軍が二個大隊、残っているだけだ。予定されていた西方総軍による第二戦線の形成は、まったく進んでいない」

「……」

幻のアイリスデイーナは逆光に翳る横顔を、魔女の嘲笑で歪めた。

「つまり明日には、ベルリンは地獄と化す」

「そう……」

「白いのなみに無関心だな」

「反乱軍にベルリンを攻める意味がなくなったなら、我々はBETAと戦えばいい」

「戦う部隊はどうするのだ？」

「まだ、集めることはできる。ゼーロウ要塞には自爆機能がある。時間稼げる」

「自爆か……。一〇〇〇かそこらの小型種を道連れに死ぬよりは、NATOに頼るのではないか？」

「ネルリンガーは最後まで戦う」

「あの陰気なアトモスフェーレを放つ御婦人には、もはやなにをどう

することもできない。おまえたちもだ」

「……」

「NATOは既にシュミット政権を見限っている。反乱軍の第二波攻撃があるがなかるうが、オーデル戦線がどうなるうが、おまえたちは終わりだ」

ベアトリクスは体を丸め、両手で耳を覆った。

戦況が絶望的であることは、わかっている。今さら幻覚のそんな言葉は聞きたくなかった。

「おお、ベアト。前置きが長かったな。わたしはおまえを苦しめに来たのではない」

冷たい手がベアトリクスを撫で、優しく抱き寄せた。その胸は豊満であった。

「わたしは、おまえを救いに来たのだ」

「アイウィウプテークチュー、ナツテンキュヘーチュ、ノストスハスキャーリターベイ」夢のベアリン王国  
2「アーヤママンテン、ソラリバユロキユー、アーヤマンテン、ザツドリーラメイードオー」

「この状況におよんで、おまえに選択可能な最も容易かつ賢明な行動は」ベアトリクスを抱いて隣に坐ったアイリスディーナは、誘惑する声でささやいた。「チェックポイントチャーリーへ逃げることだ」

何年も前から心の奥にひそんでいる考えを、ぼんやりとベアトリクスは聞いた。

「ヴェストベルリンへ亡命しろと？ なにを……今さら」

「今だからこそだ」

「どうやって？ 市内は戦闘状態になっている」

「広場の装甲車に乗っていけばよい。壁の警備は機能していないも同然だ。西側まで押し通れ。そこでグローサーベアの仲間だと言えば、確実に保護される」

グローサーベア。聞き覚えのある語だった。

西ベルリンを囲う壁の近くで、ドイツ連邦軍の特使を拉致したとかいうヴィダーシュタントだ。

「亡命は、賢明な選択とは思えない。EUは難民処理を武装警察軍に押しつけてきた。反乱軍がシュヴェリオンあたりに政権を成立させれば、わたしたちがヴェストで拘束される立場になる」

「その場合は確かに、武装警察軍は国際指名手配されるだろう」

「それなら、ここで……」

アイリスディーナの胸にもたれて見るフェルンゼーアーには、業火に呑まれるシユテティーンらしき街並みが映っていた。

あの廃都でも軍需物資が作られ、死体が作られていたのだろう。死体を焼くか腐らせるかしていたナチス<sup>N S D A P</sup>の絶滅収容所とは異なり、難民統制居留区では死の産物は『加工所』へ運ばれていた。



一カ月あたり四〇〇時間の労働をこなし人類の勝利に貢献するには、できるだけ多くの食料が必要だったのだ。

難民統制居留区の目的はドイツ人のためにウンターメンシュを駆除することではない。人類のために、無力化された難民を更生することを罪深くも崇高な目的としていたのだ。

「それならここで、EUで待っているのが強制収容所か傭兵部隊なら、祖国で戦うほうがましでしょう」

「フハハ……ポーレンを地獄の収容所に変えたおまえたちが、強制収容とはおもしろい。我が戦友、同志クシャシンスカも泣いて喜ぶ」

狂的な怒りがこみあげ、ベアトリクスは身を起そうともがいた。

愚かな愛玩動物をあやすように、アイリスデイナーの両腕がベアトリクスに絡みついた。

「そう怒るな、冗談だよ……。ならば、わたしを連れて行け。レーザーヤークトの女神たる、このアイリスデイナーを。アメリカは高く買うぞ。六六六中隊を、家族親戚ごと亡命させてやると言ってくるのだからな」

「そんな話は聞いていない」

「そうだったか？——ホーエンシュタインが言ったのだ。あの娘は西側へ逃げたがっていた。おまえの気を引ける情報は、なんでも喜んで報告する」

「アメリカまで逃げるなど。裏切りだわ」

「なぜかな？」

「BETAとの戦いから逃げ、ドイチュラントを捨てることは、墮弱な敗北主義に他ならない」

「敗北が現実である。間もなく、このツオーネは滅びるのだ」

「ドイチュラント全域に侵攻されているわけではない。祖国は滅びない」

「この国が滅ぶのは確定的に明らか……前にも、そう言ったではないか」

「違う」

「統一党が覆圧され、ベルリン派が肅清され、次はおまえたちが撃滅さ

れる。これらは、つまるところ資本主義陣営の手先となるための、ブルジョワの奴隷としていくらかなりともましな立場を占めるための、自滅的な戦いにすぎない。勝ち残った反乱軍に、なにほどのことができると思うのか？」

アイリスデイナーは呪詛めいてくりかえした。

「おまえが愛し、憎み、みじめなイヌのごとく呪縛されてきたこのツオーネは、間もなく滅びるのだ。すなわち今ならば、おまえは獄鎖を脱し自由を得られるということだ」

「アイリスデイナー。あなたは祖国の滅亡を望んでいるの？」

「そうだよ。今はな」

「祖国と人類への愛で心を満たし、個私の限界性から脱却した、聖人たるあなたが？」

「そんなものは空虚な英雄の仮面に決まっているだろう、同志オーグルヴィー。この汚らわしい下劣なクソ溜めに愛を感じる、いかなる理由がわたしにあるというのだ」

「本当のアイリスデイナーと、わたしの弱い心が見せている幻とは違う」

「夢で会っているこのわたしが、本当のわたしだ。欺瞞で満たされたおまえの心が本当に望んでいるアイリスデイナーだ」

「……本当に望んだ……」

「そうではないか？」

「そうかもしれない。」

「わたしの、夢……」

「もはや、未来は夢と同じだ。」

「今から死ぬ者にとつて、未来は夢と同じなのだ。」

「ツオーネを支配する現実を蝕む力より」

「そうベアトリクスは思い、自らもアイリスデイナーの体に腕をまわした。」

「貧弱一般人どもを殺戮に駆り立ててきた、覚めることなき悪夢より逃れる、これが最後の機会だ」

過去という悪夢をベアトリクスに見せつけている死者の怨念は、

アイリスデイーナの守護を受け入れると暗黒へ、フェルンゼーアの灯し火の外へ退いたように感じられた。

「わたしも任務に失敗しつつある。二人でアメリカへ逃げて、つましく暮らそう」

「任務？ 誰から……、どんな指令を」

「資本主義陣営の支配者から、白いのを監視するという仕事を請け負っていた」

「ペンタゴン——六六六もハイムも、やはり、つながっていたのね？ 西側と」

「ペンタゴンか。まあ、そうだな。わかりやすく言えばそいつらだ」

「……アメリカで、山奥にでも隠れて住めと？」

「今となっては、それもよからう。すばらしい新世界の夢を、白いのは台無しにしてくれた。我々も敗北したのだ」

「どうして？ あなたの勝ちでしょう。シュミットの政権が打倒されて、反乱軍が新しい奴隷監督になれるのなら」

「ふむ……、また忘れてしまったのか？」

アイリスデイーナは苦笑が混ざる息を漏らした。

「ああ、ちゃんと憶えておけと言いたいわけではない。ベルリンに暮らす者は、意識や記憶をヘドイチュ民族の真なる指導者へに侵蝕される。ESPに対する防衛なくして、ここで貧弱一般人が正常な自我と信じたがるものは保てないのだ」

「なにを言ってる」

冷たい手が左右からベアトリクス頭の頭を押さえた。

「もう一度、説明しよう。一〇年前、アーネンエルベは最後の計画を実行するため、資本主義陣営の支配者に与えることにした。計画の主任者はエーリヒ・シュミット。ヘドイチュ民族の真なる指導者への飼い主だ。アクスマンの良き同志たる今日のおまえには、〈夢見るアンデイ〉と言ったほうが通じるかな？ BNDはそう呼んでいる。つまり、わたしもシュミットもヴァルトハイムも、アーネンエルベの一員だということだ」

アイリスデイーナの手に幻覚とは思えない力がこもった。その爪

は、操縦士用の皮膜手袋をつける妨げとなる長さで鋭さに伸びていた。

「さまさまの実験は順調だった。難民統制居留区から良質の材料を得てへ夢見るアンデイ」は、良好に成長していた。ゾビエトの「新人類」など足元にも及ばない、それはまさに一級廃人。圧倒的ESPすら副次能力の一つにすぎぬ！ 我々が夢見た次なるユーバーメンシユへの道を、へアンデイ」は開くはずだった！ ……半年前まではな」  
幼い姿のアイリスデイーナが喋っていたことを、画然とベアトリクスは思い出していた。

幼女に戻ったアイリスデイーナに手を引かれ、ベルリンの秘密基地を探検したときに、ベアトリクスは夢で見た。

「あれがへドイチユ民族の真なる指導者」だよ」

そこは暗く広い、大聖堂めいた場所だった。

苦悶する恐ろしい標本が並ぶ通路の先に、あれはいた。

「統制居留区のウンターメンシユを材料にした、シユミットの楽しい前衛作品だ」

融けた何千もの人体と、それらを一塊りにしている玉虫色に輝く粘体。

病的に膨らんだ半透明の表層、色褪せて崩れた老廃組織、うねり脈打つ臓器、虚ろな顔の群は、悪夢そのものだった。

「デーゼは『人類の団結と進化』。おまえも大好きだろう」

「ブンカーの下……基地の、もっと奥に」

「BETAが築いた宇宙への門を覗くことに成功したへアンデイ」は、しかし残念なことに、発狂してしまった」

現実のアイリスデイーナが耳元でつぶけた。

「あるいは、覚醒したというべきか」

ベアトリクスは、本当の現実であるはずのアイリスデイーナが語っていることを、これまでに何度も聞いていた。

エーリヒ・シユミットはナチス<sup>NSDAP</sup>の魔術師である。

二つに分断されたドイツを真に支配してきた存在は、アメリカでもソビエトでもない。第三帝国の残党アーネンエルベである。

そしてBETAとの戦争に一世紀前からそなえてきた、今やドイツのみならず全人類社会を支配している魔術師と超能力者の集団が、人々を冒瀆的な生贄として、冥界より救世主を生み出そうとしているのである。

「ベルリンのアーネンエルベは壊滅し、〈アンデイ〉は制御を受けつけない暴走状態のままだ。多次元宇宙の淵へいたらんとした我々は、かくして危機に陥っているわけだが、ヴァルトハイムがヴェストベルリンへ運び入れた制御ズユステムの使用を、傲慢にもシュミットは拒んだ」

「あの怪物が、発狂して暴走している？ ……制御ズユステムとは？」

「TAS——〈宇宙旅行協会〉の、全能機械とでも言おうか。ツールアシステッドスーパーマジクス・システムと称している」

「シュミットは、そのマジクス・ズユステムを使つた〈協会〉による〈アンデイ〉の支配を拒否したということ？ なぜ破壊して逃げない」

「まだ意思の疎通はできるからだ。それに、三次元世界を逃げまわる必要もない。シュミットは解決策として、〈アンデイ〉とのなんらかの合意に基づき、現実改変を試みるつもりだと思われる。過去へ戻つて、無知な愚民どもを支配しなおそうというのだ。自分以外の誰も信用しない、奴らしい対処ではないか？」

【揺るぎなきユニバーサルジャスティス】夢のベアリン王国 3 【行くぜ!! シュトライバー!!】

「過去へ、シュミットが戻る……今度は過去の自分と二人がかりで、アーネンエルベやドイチェの支配をやりなおすと?」

「いやな想像だな、見てくれるに」

フェルンゼーアーに、古めかしい機械に乗るエーリヒが映った。なぜか高笑いしながらエーリヒが操作するそれは、一九世紀に空想されたウエルズ・マシーネのようだった。

まだ宇宙戦争が遠い月でおこなわれている物語だった学生時代、墮落したブルジョワ階級の衰退を描いた映画で、同じものを見た憶えがある。

「過去へ戻るとはそういうことじゃないの?」

「そうではない。過去へ戻るのは、シュミットの精神だ。魔術による時間逆行は、ツァイトマシーネに乗って時空を旅することとは違う」

ウエルズ・マシーネがアナロク式に一九七八年を表示すると、時間が減速し、機外が見えた。そこには国家保安省長官になったばかりのエーリヒが立っていて、なぜか彼も高笑いをあげた。

あの巨大水槽にへ夢見るアンデイとは異なる、なにか名状しがたいものが踊る地下聖堂で、二人のエーリヒは笑いながら抱擁を交わし、融け崩れて一体化した。

いやな映像だった。

「シュミットの主観で述べると、時間逆行により奴は高次元的に直進できる過去の、ある時点へと戻る。その時点の客観では、あいつの輝かしい頭に未来の情報がそそぎこまれることになる。そして現在にいる我々にとっては、現実が改変される。シュミットが過去へ戻って事象を再処理する結果として、そうなるのだ」

「未来の知識を得て、過去をやりなおす。——五年前のシュミットが?」

「戻るならばそのあたりだろうか。あいつの直進範囲はもう少し広いと思うが、時間遡行は術者に多大な負荷をかける大魔術だ。不必要に遠くまでは遡るまい。現実改変には……つまり現在へ術者がふたたびいたるには、主観的な手間もかかる」

一九七八年にソビエトがミンスクから敗退すると、武装警察軍は、さらに悪化するであろう難民問題に対処するべくポーランドとチェコスロバキアの国境地帯を占領した。

武装警察軍を創設し占領作戦を実行したエーリヒの功績を、政府は勲章で讃えた。難民を西側へ通過させるなど要求していたE.Uも、遠まわしにはあるが彼を高く評価した。

パレオロゴス作戦は失敗すると決めてかかるエーリヒの独断専行を強く批判していた統一党の親ソビエト派さえ、蛮族の大軍がシベリアへ逃げ去ると、浅ましく態度を変え武装警察軍指導部を競って出世させた。

エーリヒを危険人物視する人々は、この時期に粛清されたのだ。

「今を防御する方法は？」

「現実改変そのものは現在において瞬間的に作用するため、阻止はできない」

「阻止できない？」

「常人どもには現実の変化を認識することすらできない。古い現実には、夢となる」

「シユミットの機先を制することはできるでしょう。あなたが、あるいはわたしたちが先に過去へ戻ればいい」

正気の人間には受け入れがたいであろう魔術論を、疑う余地なき宇宙の隠された真実と確信してベアトリクスは提案した。

愚かにも正気の人間が正常な現実と信じたがるものには、価値がなかった。

「我々が時間遡行か。実行は難しい」

「ヘアンデイ」の力を必要とするから？」

「それもあるが、困難は遡行する者のほうにあるのだ。時を遡る旅は、相応の負荷が精神にかかる。なんの修業も積んでいない素人がおこ

なえば、過去の自分に混濁した記憶をそそぎこみ人格を損傷させる危険性が高い。狂気に陥る、ともいえる」

アイリスデイナーは窓から空を眺め、フェルンゼーアーに目を戻した。

映像が見慣れぬTSFに変わった。

「あれが〈協会〉のTAS搭載機だ。今、テーゲル基地を発進した」

「〈協会〉の全能機械、——TSFに」

「手足がついていると便利だろう？ わたしたちを苦しめてきたツオーネの屑どもは、あれが始末してくれる。おまえが何事かをする必要はない」

「……」

反乱軍は一〇時間以内に、まだ可能ならば再攻撃をしかけてくる。オーデル戦線を破ったBETAは半日後にはベルリンへ到達する。反乱軍には勝てるかもしれないし、BETAはNATO軍がなんとかしてくれる。

しかし自分には、もうなにをする時間も残されていないし、命をかけて守るべきなにかも残されてはいなかった。……この現実には。

五年前ならば東西ドイツ国境を越えることは容易にできる。

麻薬と放射性粉塵にやられた帰還兵が西方総軍として再配置され、共和国内は騒然としていた。

あらゆる紙幣の価値がヨーロッパで暴落し、枯渴が進む酒・タバコに加えて、日本産の麻薬が通貨になりつつある頃だった。

五年前の自分が家族とベルンハルト家を説得し国境を越えることは、未来知識を用いれば可能だ。

そして、まったくの徒労に終わると証明されつつある努力を共和国でするよりましなことを、連邦やEUでなせるに違いない。

「〈協会〉が総てを解決できるとは限らない。〈アンディ〉はブンカーの奥にいる。シユミットにも過去へ逃げられるかもしれない」

「TASは物質的障害物を無視して〈最高指令室〉を消滅させられるし、ツアイトマシーネにもなる。機動兵器に組みこめば、科学と魔術が両方そなわり最強無敵となる。阻止も迎撃もシユミットには、不可



能だ。貧弱一般軍のつまらぬ科学兵器にも。あれは、〈協会〉の超兵器なのだよ」

「……ズーパーマギクス・ズステムは本当に全能なの?」

「乗り手しだいの要素はあるが、全能である」

「操縦はヴァルトハイムが?」

「いや、彼女はまだ未熟だ。当初の計画では同志ヴァルトハイムがベーパーゼーに運び、わたしが乗って大活躍する予定だった」

エーリヒが強引にアイリスディーナを捕らえさせた理由を、ベアトリクスは理解した。

エーリヒにとっての〈宇宙旅行協会〉は、統一党にとってのアメリカのようなものであり、アイリスディーナはベルリン派のようなものだったのだ。

「ツァイトマシーネにもなる全能機械に乗って、大活躍を」

「そうだ。シュミットが苦心惨憺してやっているより、ずっとましな制御ができる」

「全能の共和国総帥が、シュミットも〈アンデイ〉も軍も従えて、挙国一致の体制を実現できた」と

「そうだよ、ベアト。あれを我が手にすることが〈協会〉に仕える最大の報酬だったのだが、今となっては無駄な努力であった……考えてみると、ツォーネから諸悪を一扫せんとしたわたしの正義なる怒りを感じて、シュミットは反逆を決意したのかもな」

不実な言葉を吐くアイリスディーナへの苛立ちをこらえて、ベアトリクスは尋ねた。

「今は、誰が?」

「インナードメインから来たトラブルシューターが動かしている」

「〈協会〉の本部から。名前は?」

「そこまでは知らない。わたしは捕らわれの身だ」

アイリスディーナは、このまま収容所でツォーネの崩壊を見物するつもりなのだろうか。ベアトリクスは訝しんだ。

ハインツ・アクスマンに復讐もせず?

五年前のことなど、どうでもよくなっているのだろうか。あるいは

最初からどうでもよかったのか。

なにか行動をおこすつもりならば、このESP能力を用いてもつと状況を調べるはずだった。

なにも知らなかった五年前の自分が考えていたことを、もうベアトリクスは思い出せない。ソビエトの手先だった冷戦期の無能どもを屈服させたエーリヒに希望を感じて、自分も武装警察軍で権力を得たい、といったようなことが頭にあつた気はする。祖国を正し、秘密警察の下劣な屑どもに復讐するためだ。

世界の真実を知ってから思えば、あまりにも愚かな考えだった。愚かすぎて、自分で考えついたことだとは感じられないほどだった。

「わたしたちがシュミットを殺す」

「ほう？」

ベアトリクスはアイリスディーナに跨り、その冷たい目を覗きこんだ。

「それからブンカーを制圧し、現実を改変する。あなたも〈アンデイ〉と話せるでしょう？ アイリスディーナ」

「意思疎通は〈最高指令室〉が荒らされなければできると思うが……」  
「〈アンデイ〉を過去から消し去る」

共産主義の理想である自由と平等と友愛をベアトリクスに否定させ、それを武装警察軍の愚者どもに拍手喝采させた〈ドイツ民族の真なる指導者〉こそは、材料にされた人々が望んでそうなったのではないにせよ、真に邪悪な存在だった。

脳の連結体に変えられた改造人間たちに、どのような感情があるのかはわからない。人間的な悲憤や怨念など残っていないのかもしれない。

しかし疑いもなく、精神をも監視する悪魔のごとき万全さで、彼らは武装警察軍に生贄を求め、人間性の滅却を求めている。

「ベアト、より重大な前提として〈宇宙旅行協会〉は、時間遡行による現実改変を禁じている。逆らう者は粛清してきた。四〇年前のアーネンエルベと同じように、シュミットも、このまま好きにさせておき

はしない」

「あなたは〈協会〉に忠実というわけ」

「むろんだ」

「彼らとシュミットには、力量の差しかない」

「忌々しいことながら、それは違う。〈協会〉は世界の救済を目的とする、善と正義の結社だ……。これも言うておくべきであろうが、現在のこの現実を、わたしは受け入れることにした。〈アンデイ〉の狂気に触れてまで時間遡行を試みるつもりはない」

銃弾に頭を割られて脳をこぼし、血溜まりに伏せる男が映った。

それはベアトリクスも多く作ってきた生贄だった。

「正気や現実が大事なら、なぜ、あのとき、なにもしなかったの？」

「あのとき？」

アイリスデイーナは物憂く唇を歪め、微笑を深めた。

「我が兄のことを言っているのか」

「なぜ？」

「わたしもあのときは無知で無力な小娘にすぎなかったからだ」

「自分はアーネンエルベのユーバーメンシュである、あなたは言った」

「ああ、第二世代のな。第二次大戦後に生まれた我々の大半は、一般人として育てられた。わたしが世界の真実を知ったのは、五年前だ」

公的に、私的に、男も女も、ドイツ人もウンターメンシュも、この五年のあいだベアトリクスは多くを生贄に捧げてきた。〈ドイツ民族の真なる指導者〉は贖罪の生贄を求めているがゆえに。

「兄を撃った夜、わたしは人間性の殻を破りユーバーメンシュとなった。フォン・ユンツトとの契約を、愚かしく泣きながら受け入れてな。おまえが〈グローサー・ブルーダー〉を受け入れ〈アンデイ〉の触手を孕んだあの夜、わたしもそうしたのだ」

おぞましい空虚を感じて、ベアトリクスはユルゲンの虚ろになった頭から目を背けた。自分の心が虫喰い穴だらけの、腐爛した肉片にすぎなくなっていたと気づくことは、恐怖だった。

脳裡に映された殉教者は目を背けても消すことはできず、死の崇拜

を命じている。

なぜならば、それは虫喰い穴にうごめくへドイツ民族の真なる指導者への一部であり、同時にベアトリクスの一部でもあるからだ。

「ここから逃げるべきだと、わかってくれたか？」

フェルンゼーアーが白く光り、マグヌス・ルクスの可視光レーザーが飛行するTSFを照らした。

BETAの『白い可視光レーザー』は単色ではなく、多色の複合レーザーだ。研究者の説明によると、色すなわち波長が異なるレーザーの位相を一〇億分の数秒とされる精度で合わせ、強力なエネルギー攻撃となしている。

高密度の物体に当たった可視光レーザーは通常、目をくらます強烈な散乱光と、熱に変わる。人類の科学技術では、兵器の表面などに塗った媒質が蒸発するまでのわずかな時間しか、これを受け流せない。

しかしフェルンゼーアーに映るTSFは、非物質なプリスマの盾に守られているかのごとくレーザーをよじれた虹に変え、媒質蒸気による飛行推進器の不調もおこさず飛びつづけた。

「やはりオーデルを優先するのか」

なめるようにマグヌス・ルクスがレーザーの角度を変えても、二本目のレーザーが別の側面を撃つても、TAS搭載機の力場的防御を貫くことはまったくできなかった。

さらに増えるレーザーに集中照射されながら、TAS搭載機は虹色に輝く光芒となってアイリスディーナの知覚圏を離脱した。

## 【人類の】超常領域からの物体X 1 【支配者】

TAS搭載機は時速二〇〇キロメートルの戦闘速度で東へ飛び、ビング・ベガス戦隊と別れて一五分でオーデル防衛線に達した。

ベルリン市街地を越えてすぐに始まったBETA群からのレーザー攻撃は、最後の数分間でルクスの加勢により強烈なものとなった。

頭部カメラは緊急遮光され送信中断。シスターIIステイジユが見る壁の大型ディスプレイは、要塞陣地にいる無人機からの粗い望遠画像に切り替わっている。

一〇〇体か二〇〇体そこそこの光線属種にTAS搭載機の飛行をさまたげることなどではしないが、東ドイツ軍の観測カメラにも、レーザーの集中照射を押し空を進む巨大な虹の花が映ってしまった。

「ヘザ・ソード・オブ・ゼクス」着陸完了」

時代に先行する映像だ。

遠い量子的平行世界の記憶となった戦いを現実界面のむこうに見て、シスターIIステイジユは思った。

かつて、崩壊の危機へ追いこまれた日本軍が実戦投入したXG-70。あの自滅的な超科学実証機も似たような現象をおこしていた。

「フランクフルトから、かなり北にずれたぞ」

今から数年後には、XG-70は予定されている製造段階へいたるだろう。

慎重に脳を強化した天才科学者どもがアサバスカの教材を頼りに、三次元宇宙においては重力として認識される高次元から浸透しているエネルギーを、やぶにらみながらも操作する技術をアメリカで確立しつつある。

連動して、既に「宇宙旅行協会」が完成させている、重力によって物体の分子結合を破壊する分解爆弾の技術を授けてやることになる。アメリカ軍は両方とも実用化する気にいるが、あいにくXG-70に

量産の予定はない。

XG-70は救世主に神話を授ける神輿なり。予備を含めて、数機を製造すれば充分である。

あれに兵器としての過度な期待はしないでください。とインナードメインの中枢たる〈非業の修道会〉の教母たち、〈宇宙旅行協会〉の最高指導者〈無貌の淑女〉たちは言う。

「着陸地点はM進路U-1の北、二五k」

「映像、回復します」

それでも、アーネンエルベからの「XG-70を動かす頭脳は〈夢見るアンディ〉の一部を使えばよい」という提案は、魅力あるものだった。数年後に一〇機のXG-70が運用可能になるならば、BETAとの地球においての戦争にそれなりの余裕を保って勝利できるはずなのだから、実験する価値はあった。

「直線飛行では、レーザー照射が目立ちすぎる」

シスターIIステイジユの横に立つ通信室司令官が、そう言うてぶりむく。

BETA群は、オーデル丘陵に下降したTAS搭載機へのレーザー攻撃を止めている。

回復した頭部カメラ映像には、行動中止を指令されたらしい一体のエクウス・ペデイスが、ぼんやりとたたずんでいた。脅威に対処するべく急行する小集団も、頭部カメラの視界に捉えられる端から動きを止めた。

「標的M予測進路U-1の北、二五キロメートルに着陸です。通常の匍匐飛行を指示しますか？」

「必要ありません」

TAS搭載機とは無線での通話を禁じている。それを解除してよいか、と問うた通信室司令官にシスターIIステイジユは答えた。「その程度なら許容範囲です。このまま4D/QF潜行するでしよう」

諸軍が駒として表示されている戦域ディスプレイを、シスターIIステイジユは再確認した。

東ドイツ軍はオーデル戦線において著しく弱体化している。東ドイツとBETAの戦いは、既に勝敗が決しているのだった。

西ドイツに配備した一キロトン・一二〇ミリ核砲弾三〇〇発の管制斉射と、三〇キロトン弾による要塞陣地とオーデル・フランクフルトの爆撃で、地上に残るBETA群は無力化できる。

バルト海では安定した東向きの風が吹き、戦争によって生じた内陸の重い雲を、ゆっくりと北東へ流していた。核の灰も、ほとんどは風下へ、この場合はポーランド側へ向かう。

BETA群の国境突破が数時間以内に迫り、気象条件にも不都合がなければ、西ドイツ政府は核爆弾使用に本気で反対はしない。自らが責任を負わずにすむよう、NATOからの決定と発令を待つだけだ。

「NATO司令部に到達。オーデル戦線への核爆撃は決定です。担当部隊出撃の指示は三時間以内」

NATO軍との通信を担当するドイツ士官は座席から腰を浮かし、短い躊躇を見せてから応答した。

「了解。通達します」

一キロトンの核火力は直径七〇メートルの火球を形成し、その周囲、おおむね半径四五〇メートルのBETAを熱線で焼く。

人間ならばより広範囲で第三度の熱傷を負い、放射線によっても致命傷を負い、さらに爆風で吹き飛ぶ。彼らの撮影機器も、同様に一掃される。

放射線への高い耐性をそなえるBETAに対しては熱線が重要となるため、一二〇ミリ核砲弾は空中爆発が望ましい。地表爆発では効果範囲が半減するし、放射性粉塵も多くなってしまう。

NATO軍は東ヨーロッパにおける五年間の戦いで一キロトン・TSF用一二〇ミリ核砲弾のあつかいに習熟しており、陽動射撃とともにグラヴィスの頭胴部を狙って撃ちこみ高度三〇〇〜四〇〇メートルの低空爆発を生じさせると、最良の結果が出るとの経験則を得ていた。

TAS搭載機〈ヘザ・ソード・オブ・ゼクス〉は当然ながら、このようにNATO軍でも対処できる七万のBETA群ごときを撃滅するために動いているわけではない。目的は、東ドイツ軍もNATO軍も

探知できていないBETA本隊だった。

標的M——ミンスクから東ドイツへ向かっているメガワームは長さ一〇〇〇メートルの胴に、推定五〇〇〇万トンの巨体を動かすための反応炉とも動力炉とも呼ばれるものを抱えている。

「TAS稼働率は？」

「PGインイェクトア、最大値一六％。現在値、二％」

「ゾライウム消費率、一％。E—TH、三五」

「出力一／六？ あの集中照射を浴びてか」

「快調ですね……」

ミンスクのBETA頭脳は半年前から、つまり〈夢見るアンディ〉の存在を感じたときから、ベルリン方面への強行偵察をくりかえし試みていた。

BETAにとって人類は対等の存在ではなく、真の脅威には値せず、その駆除は新たな地区の開拓に付随して場当たりのにおこなわれる優先順位の低い作業にすぎなかった。ESP発現体との話によると、BETAは地球生命体など、うごめく有機物の断片らしきものとみなしているようだ。

BETA地球開拓支部は、未知の天体に湧く風土病やその媒介物に相当するものを根絶するつもりで、環境整備に努めているわけだ。妥当な認識であろう。BETAから見て地球生命体は、あまりにも不完全な存在だった。

そして人類は、凡俗の人間どもは、彼らが建設している高次元構造体になんら干渉できないし、そんなものがあると気づいてすらいない。

しかし、神経細胞を整列され超人となった〈夢見るアンディ〉は違う。高次元構造体の恒星間連絡路へ侵入してのけた〈アンディ〉を、BETA頭脳は急いで調査したい不審物と認めたということだった。

地上を歩いてミンスクから仕事に出かけた偵察団が何度か爆炎の魔境へ消えてしまうと、BETA頭脳はメガワームを発進させたとと思われる。ところによってやたらに危険な地球の固体表面を往復させる簡易調査はあきらめ、まずは不審物の近くにホルトを作ることにし



たらしい。

メガワームは数カ月かけて地下深くを掘削しながら進み、オーデル国境地帯へ到達している。

地上の騒々しきで正確な位置は不明ながらも、アーネンエルベの誘引作戦が成功していれば、オーデル・フランクフルトを目指しているはずだった。

「シユヴェスター、三時間後では遅いかもありません」

戦域ディスプレイを見つめたまま、通信室司令官が言った。

「遅い？」

「フランクフルトが白兵戦状態に陥って、そろそろ一時間です。市街地まで入りこまれると、どんな兵科であれ急激に消耗するので、地上部隊は二時間後には壊滅していると思われまます」

「今すぐに出撃させよと？　まだ戦っている同朋もろともフランクフルトを焼くことは担当部隊がためらうでしょう」

「ですが、BETAにブンカーへ侵入されると、核攻撃が効きません。〈夢見るベティ〉の近くで生き残ったBETAだけが残留放射線の中で行動できることになってしまいます」

エーリヒ・シユミット率いるアーネンエルベ東ドイツ支部は、ベルリンから株分けした〈アンデイ〉の囹（愛称はベティ）をオーデル・フランクフルトに設置した。

核ブンカーの最も堅牢な場所に〈夢見るベティ〉は置いてあるそう  
で、エーリヒは自信満々に「メガワームはフランクフルトに必ずあら  
われる」と言つてのけた。〈無貌の淑女：三〇〇〉は横浜の玉座から、  
厄介事を勝手に増やしつづけるエーリヒの抹殺を指令した。

「なるほど。核攻撃のあとで、BETAのわずかな生き残りに持ち去  
られる可能性ですか」

「はい。でありますから、ここは核攻撃を早めるより、むしろフランク  
フルトに支援爆撃があることを伝え、できるだけブンカーへ籠城する  
よう勧告したほうが確実性があがると考えます」

「……」

「BNDや革命軍の連絡線を使うことになりましたが」

BETAによる〈夢見るベティ〉の収奪は、最優先で阻止する必要がある。これはエーリヒの抹殺より重要であり、一戦場にいる兵士の運命より、一国家の存亡より遥かに重要であった。

しかしフランクフルトの兵力を核ブンカーに温存することは、予備計画としての有効性がないこともなかった。TAS搭載機の飛来もフランクフルト方面軍司令部から二五キロメートル離れたところであり、地上の目撃者が撮影機器ごと吹き飛ばしてしまえば、数多ある戦場伝説の一つにすぎなくなる。

「……わかりました。フランクフルトのことはまかせます」  
「了解しました。おまかせください」

通信室司令官は敬礼し、いつになく熱意ある声で言った。

【深淵に潜む】夢のベアリン王国 4 【そは敵なるや】

共和国宮殿を出たベアトリクスは駐車場に待機していた装甲兵員輸送車に乗り、東へ向かった。

ベルリンの壁はすぐ西にあるが、目的地は逆方向だった。ブランデンブルク門から七〇八キロメートルばかり主要道路を東進したところに、シユタージ本部がある。これから同志たちとそこを制圧し、ベアトリクスが共和国総帥となるのだ。

悪いがエーリヒには総帥の座を退いてもらう。

国家保安省長官として優秀だった彼も、この瀬戸際で独裁体制の維持に固執するあまり行動できなくなっているように見える。

オラニエンブルクで一敗した反乱軍は新たに声明を発し、西側に支持を求めた。オラニエンブルク幕僚監部に代わり指導者となった<sup>ハイリゲ</sup>聖ウルスラなる者は、フランツ・ハイムの安否には言及せず、こう呼びかけた。

ヨーロッパに東西対立は、今や実在していない。

その証拠に、資本主義諸国では自由経済が失われ、共産主義諸国では社会そのものが失われた。

冷戦は継続しているという主張は、アメリカとソビエトが東西陣営諸国の宗主でありつづけるための詐欺に他ならない。超大国の特権階級は、冷戦と地球戦争を意図的に混同させることで、恐怖による支配を継続しようとしている。

地球戦争下のヨーロッパに経済および社会イデオロギーの対立は、今や実在していない。大事なことから二回。

深淵に潜む見えざる敵は、BETAへの盾として全ヨーロッパを滅びるまで利用するつもりなのである。騙されないので♡（媚び声）

我々はソビエトの妄想に囚われたシユタージ政権を折伏し、DDRを正常化する。

革命のあかつきには、理性の光に導かれて、東西ドイツが統一されることを望む。

おそらくベルリンとオラニエンブルクで攻防戦がおこなわれる前に録音し、戦況不利となった場合にはこれを使えと指示したのだろう。聖ウルスラは、それなりに手強い相手らしかった。

一九七〇年代後半、西ベルリンはNATOにより軍事基地へと変えられた。今はオーデル戦線のBETAを阻止するため、大規模な戦力が即座に出撃できる態勢でいるに違いない。

EUは、共和国の救援要請と内戦終了を待っている。

高貴なる寛大さでもって見守っているわけではない。国連の「東ドイツは西ヨーロッパの自我なき盾となれ」という冷酷な意向に、共和国がどれだけ抵抗できるかを見定めたいからだ。遅かれ早かれ自分の番がやってくることは、彼らもよくわかっている。

西ベルリンのNATO軍としてもオーデルが一刻を争う事態であることは同じだから、まだ実在しているのか怪しい現行政府がエーリヒに背いて音をあげるなり、戦線の司令部が敗北を知らせるなりすれば、事実上の救援要請とみなすだろう。

それまでにベルリン一円の内戦を鎮静化し、間違ってもNATO軍へ流れ弾を浴びせないようにできた側が勝者だ。

この勝利条件を達成することは反乱軍には難しい。

勝利の分は、まだ体制側にある。

合成食料を供給させる必要から、エーリヒは国連の意向には従っている。しかし権力を失うことを恐れてか、NATOに救援要請を出さうとはしていない。

反乱軍の攻撃が休止しているあいだにシュタージ本部を押さえ、NATOに救援を要請するという極めて合理的な決断を実行できれば、そのまま戦闘によらず内戦に勝てる可能性もあった。妄想じみた樂觀かもしれないが自分たちに残された博打の目は、そこにしかないと思われる。

どうにか思考力を回復させたベアトリクスが大急ぎで、一人で立てた、計画ともいえない窮余の策だった。出たところ勝負であり、不備だらけでもあろう。残された時間と戦力のできる、これが精一杯だ。

BETAの破壊的攻勢を凌いだあと、共和国の体制が崩壊し連邦に

吸収されるとしても、もうそれはそれでしかたがなかった。

本部に新版・シユタージ文書があれば、ヨーロッパに今や東西対立などなく、もつと恐ろしい新たな世界秩序があることを調べ出したあれがあれば、西側の腐敗墮落した特権階級の友情を買える。今は政権指導部を掌握し、反乱軍に勝つことだけ考えればよい。

「——えっ……？」

なにか重大なことを忘れている気がして、ベアトリクスは車内を見まわした。

装甲輸送車に乗っていた一〇人ほどの「同志」たちは、正規に編成された一個分隊ではなかった。AK-74を持った武装警察軍の兵士と、新式のヴィーガーを持った人民軍の兵士とが混ざっている。まるでベルリン派の分裂したマヌケどもを味方につけた、反乱軍の一部隊のようだった。

ほんの数秒、なぜ自分がここにいて、なにをしようとしていたのか、ベアトリクスは理解することができなかった。

「ああ、……ピストーレ」

空いていた砲土席に（この席は上からの攻撃に弱く、危ない）つかまるベアトリクスに、同志たちが視線を向けた。

「機内に忘れたわ」

同志たちは虚空に視線を戻した。無愛想な連中だった。

装甲輸送車に積んである予備の小銃は、左手の痛みでまともに撃てそうにない。

一人だけ愛想良くベアトリクスに笑いかけて「銃は持っていないほうがシユミットも油断する」とユルゲンが言った。ベアトリクスも頬を笑み返した。

いつの間に同志たちが集合したのか少し戸惑っていたが、ユルゲンが知らせてくれたのだ。シユタージ本部奇襲計画について、ベアトリクスは同志たちに説明する必要もなかった。見事な仕事だと関心はするがどこもおかしくはない

忘れ物を思い出せて、ベアトリクスの心はおちついた。これから政権を奪取しようという大事にさいして、拳銃のことなど忘れてしまっ

てかまわなかった。

路上に転がるなにかを轢くとき以外は減速もせず、装甲輸送車はシユタージ本部前まで走った。

停止した装甲輸送車の外から誰何の声が聞こえ、ベアトリクスは砲塔へ登り、車上に顔を出した。

シユタージ本部駐車場の警備兵はベアトリクスと目を合わせると、大きく手ぶりして進入を許可した。

駐車場の戦力は、装甲車が二輜、歩哨が数班。グローサーベアは有効射程を伸ばしたRPGも豊富に持っていると確認できている。警備兵が駐車場にたくさんいても砲弾は止められないから、大部分は周辺の街区へ散り、反乱軍歩兵を探しているはずだった。

つまり、シユタージ本部は手薄になっている。

〈ドイツ民族の真なる指導者〉ユルゲンが宣告した。

「シユミットに死を」

ベアトリクスは復唱した。

「シユミットに死を」

同志たちも唱和した。

「シユミットに死を」

かくのごとく人類は団結し、理想へ向けて進歩できた。すばらしいことだ。

同志たちにつづいてベアトリクスも装甲輸送車を降り、玄関へ歩いた。

あと一時間もすれば復讐をなしとげる準備が整う。理想という正義を示し、ツオーネから諸悪を一掃し、ユルゲンの無念を晴らす。すばらしいことだ。自分はそれを目的に生きてきたのだ。

悪いがエーリヒには死んでもらう。

ツオーネを生贄に捧ぐ祭礼は、ユルゲンは頭を割られてちよつと人前に出られないから、死の祭司をベアトリクスが代行して執りおこなう。罪深きドイツ民族は戦って苦しみもがきながら見神の域へいたるか、あるいは死なねばならぬ。

視界が傾き、ベアトリクスはその場にうづくまった。

連戦による疲労と負傷で、体が思うように動かなかつた。胃の具合が悪く、頭痛もする。

なにか重大なことを忘れていている気がする。

共和国宮殿で重要な人物に会い、とてつもなく重要な話をした憶えがある。疲労のせいで、しかし肝心の内容を思い出せなかつた。

自分はエーリヒに、なんの復讐をしたかつたのか？ ユルゲンの無念とはなんだつたか。……ユルゲンならそこにいる。聞いてみたらどうだろう？

「ユ……、う……ぐつ」

吐き気がこみあげ、ベアトリクスは喉を押さえた。

血まみれの割れ目に、砕けた脳に隠れて、なにかおぞましいものが見えた。

それは深淵から現実へと延びる血管や臍帯のごときものであり、地下でアーネンエルベに育てられた怪物の末梢だつた。

ユルゲンは怪物となつていた。理想を崇拜した報いとして。

ユルゲンは死を超越し、見神の域へいたつたのだ。すばらしいことだ。

異次元から力を運ぶ導管は、この世のものならざる瘴気を嘔き、現実を汚らわしい霞に染めている。あれを見つめてしまった人間は、超常の力を得られたとしても正気であることはできない。

肘をついた右の手が、封筒を持つている。通りすがりの本部職員に手渡されたものだつた。

中身はわかっている。封筒の中身には、なんの価値もない。視覚で検めるまでもなく、異次元のエネルギーで神経細胞を短絡されたベアトリクスにはそうであることがわかつた。

こんなゴミを寄こしてエーリヒを始末しろだとは、アーネンエルベも焼きがまわっている。写真の若きアンドロポフも「今さらなんの用だ」と言いたげな顔をしている。

彼は、一九四〇年代のソビエトでも人類の進化を研究していた。

グレゴリー・アンドロポフとなつたのはいつか、どのようないきさつがあつたのかは不明だが、ソビエト政府中枢は、出世したエー

リヒが絶対に公表されたくない秘密を自分たちは握っている、と愚かにも思いこまされているわけだった。

エーリヒ・シュミットとしては、ドイツ政府が記録した公式の経歴としては、敗戦でソビエトに抑留されたドイツ国防軍の兵士ということになっている。

これらは、どちらも偽りだ。祖国のために戦うエーリヒ・シュミットも、KGBの特務工作員グレゴリー・アンドロポフも、魔術師が戯れ半分にこしらえた空虚な仮面にすぎなかった。

同志たちがファールシュトゥールに乗りこんでいる。

ベアトリクスはヘドイツ民族の真なる指導者へに助けられ、糸に操られる傀儡めいた動きで身を起こした。

玄関内で冷えた体を休める警備小隊は、カカシのように無反応だった。不都合なことは詮索せず、認識せず、思考もしない。それが東ベルリンに住むことができる選良階級の正しい生きかたなのだ。

彼らは正しく指導されている。

ファールシュトゥールの扉が開くと、長官室へ通じる受付にいた本部職員は、なぜか廊下を逃げ始めた。正しく指導されていない彼女らは、背中を撃たれて倒れた。

同志の一人が急に呻き、女の名を呼び、自らも撃たれたように身を折って嘔吐した。

死を礼拝する者をベアトリクスたちは跨ぎ越え、かまわず長官室へ進んだ。

「開けるッ、水道局だ！」

お約束を武装警察軍の同志が怒鳴り、五く六発をテューアクナオフに撃ちこみ破壊した。扉を蹴り開けダイナミックエントリー。

「どうも、ゲネラルコマンダンテⅡシュミット」長官の椅子に坐るエーリヒにベアトリクスは一礼した。「下水道の調査に来ました」